海中等國語讀本 落合直文編 卷九

375.9
Dc8
資料室

41612
教科書文庫
4
810
41-1906
2000301810

資料室

廣島大學圖書之印

廣島大學圖書之印

廣島大学
教
30756
文
書

再訂

中等國語讀本 卷九目次

一、花の譜……一
一、梅……一
二、雪團……二
三、芙蕖……三
四、厚朴……四
五、石竹……五
二、丹波少將……六
三、自然のあはれ二篇……一三
一、月と露……一三

375.9
Oc8

二、花と月……一四
四、法性寺忠通……一六
五、比良の山風（短歌）……二〇
六、壇の浦その一……二四
七、壇の浦その二……二八
八、漁村……三五
九、氣候風その一……三七
一〇、氣候風その二……四二
一一、開國の氣運……四五
一二、豐公征明論……五二
一三、桶峽（新體詩）……五六

一四、鉢の木その一（謠曲）……五八
一五、鎭西八郎爲朝その一……六三
一六、鎭西八郎爲朝その二……六七
一七、戰爭と文學……七二
一八、讀書の選擇……七八
一九、元祿時代の文學……八四
二〇、蟲の聲（俳句）……九一
二一、石廊崎……九三
二二、友人の洋行を送る……九八
二三、人生の四季……一〇〇
二四、浮世のさが二篇……一〇九

一、人のなき跡……一〇九
二、常ならぬ世……一一一
二五、寂光院……一一三
二六、落花の雪……一一八

卷九目次終

廣島大學圖書之印

再訂 中等國語讀本卷九

一、花の譜

一、梅

梅は、野にありても、山にありても、小川のほとりに在りても、荒磯の隈にありても、啻に、その花の美しく、香の清きのみならず、あたりのさまをさへ、ゆかしき方に見するものなり。崩れたる土塀、歪みたる衡門、あるは、掌のくぼほどの瘠畑、形ばかりなる小社などの、常は、眼にいぶせく、心に飽かぬものも、この花の一木、二木、立ちまじりて、咲き出でなむには、をか

しきものとぞ眺めらるゝ。たとへば、德高く、心淸き人の、如何なる處にあれども、その居る所の俗には移されずして、却りて、その俗を易ふるが如し。出師の表を讀みて、涙を墮さぬ人は、なほ、友とすべし。この花好まざらむ男は、奴とするにも堪へざらむ。

二、雪團

雪團は、紫陽花に似て、心多からず。初は、淡く、色あれど、やがては、雪と、潔くなりて終る。たとへば、聊か、氣質の偏りたる人の、年を積み、道に進みて、心ざま、純く、正しくなれるが如し。遠く、望むも好し。近く、視るも好し。花とのみいはむや、師とすべきなり。

三、芙蕖

芙蕖は、花の中の王ともいふべくや。れのづから、具れる位高く、德秀でたり。香は、遠く、わたれど、巖桂、瑞香、薔薇などのやうに、さし逼りたる如き趣なく、色は、勝れて、麗しけれど、海棠、牡丹、芍藥などのやうに、媚き立てる方にはあらず。人の見るを許して、狎るゝを許さざる風情、また、儔なく、尊し。曉の星の光の薄るゝ頃、靄、霧、立ち罩むる中に開く音する、それと、姿を見ざるうちより、はや、人をして、あこがれしむ。雲の峰、忽ち、崩れて、風、ざわざわと、高き樹に騷ぎ、空、黑くなるやがて、夕立雨の、一ときり、降り來るに、早くも、花を閉ぢたる賢さ、大智の人の、機に先立ちて、身を取り置き、變に臨みて、悠々たるにも似

て、助詞
てつ、ろふ

たり。ちり際も、莟の時も好く、散りての後、一ひら、二ひら、漣に、身を任せて、動くとも、動かざるともなく、水に浮べるも面白し。花ばかりかは、葉の浮きたる、卷きたる、開き張りたる、破れ裂けたる、枯び果てたる、皆好し。茄の、綠なせる時、赭く、黑めるる時、いづれ、好からぬは無く、蜂の巣なせるものも、見て、趣なからず。この花の、涼しげに、咲き出でたるに、長く、打ち對ひ居れば、我が、花を觀る心地はせで、我が、花に觀らるゝ心地し、顧みて、さまざまの汚を帶びたる、我が身の、かひなく、口惜しきを覺ゆ。この花を愛づるに堪ふべき人、そも、人の世に、いくたりかあらむ。

四、厚朴

朴は、山深きあたりの、高き梢に、塵寰のけがれ、知らず顏して、たゞ、青雲を見て、嘯き立てる、氣高さ、比べむ方なし。香は、天つ風の、烈しく、吹くにも壓されず、色は、白壁を削りたればとて、かくはあらじと思はるゝまで、潔きがなかに、猶、暖げなる趣さへあり。瓣は、一重なれど、思ひ切つて、大く、咲きたる、なかなかに、八重なる花の、大なるより、眼ざまし。心のさまも、世の常、ありふれたるものとは差ひて、仙女の冠などにも爲さば爲すべき花の面影、かうがうしく貴し。この花を、瓶にせむは、たゞ人の堪ふべきにあらず。まづは、漢にて武帝、わが邦にて、太閤などこそ、これを、瓶中の物となし得べき人なれ。

五、石竹

瞿麥は、野のもの勝れたり。草多く、茂れるが中に、この花の咲きたる、或は、水、乾きたる河原などに咲きたる、道行く者をして、優しの花やと、獨言たしむ。馬飼ふべき料にとて、賤の子が、刈りて歸る草の中に、この花の、二つ三つ、見えたるなど、誰か、歌心を起さざるべき。（幸田成行著讃言）

二、丹波少將

治承三年正月下旬に、丹波の少將成經、平康頼入道、二人の人々は、肥前の國鹿瀬の莊を立ちて、都へとは急がれけれども、餘寒も、いまだ、烈しく、海上も、いたく、荒れければ、浦づたひ、嶋づたひして、二月十日頃にぞ、備前の兒嶋に著き給ふ。

それより、少將は、父大納言殿のわたりあるなる、有木の別所とかやに尋ね入りて、見給へば、竹の柱、舊りたる障子などに書き置き給ひつる、筆のすさびを見給ひて、「あはれ、人のかたみには、手蹟に過ぎたる物ぞなき。書き置き給はずば、いかで、これを見るべき」とて、康頼入道と二人、讀みては泣き、泣きては讀む。安元三年七月二十日出家、同じき二十六日、信俊下向」とも、書かれたり。さてこそ。源左衛門尉信俊が參りたるをも知られけれ。傍なる壁には、「三尊來迎便あり。九品往生、疑なし」とも、書かれたり。このかたみを見給ひてこそ、さすが、欣求淨土の望もれはしけりと、限なき、なげきの、中にも、聊か、たのもしげには宣ひけれ。

その墓を尋ねて、見給へば、松の一簇ある中に、かひがひしく、壇を築きたることもなく、土の少し、高き所に向ひ、少將、袖かき合はせ、生きたる人に、ものを申すやうに、泣く泣く、かきくどきて、申されけるは、「遠き御守とならせれはしましたることをば、嶋にても、かすかに、傳へ承つて候ひしかども、心に任せぬ憂き身なれば、いそぎ參ることも候はず。成經、かの嶋に流されて後の便なさ、一日片時の命も在りがたくこそ候ひしかども、さすが、露の命は消えやらで、この二年を送りて、今、召し還さるゝうれしさも、さる事にては候へども、父大納言の、まさしく、この世に渡らせ給はむを見參らせて候はばこそ、さすが、命の長きかひも候はめ、これまでは急がれつれ

ども、今日より後は、急ぐべしとも覺えず」とて、かきくどきてぞ泣かれける。まことに、存生の時ならば、大納言入道殿こそ、いかにとも宣ふべきに、生を隔てたるならひほど、恨めしかりけることはなし。苔の下には、誰か答ふべき。たゞ、嵐に騷ぐ松の響ばかりなり。

同じき三月十六日、少將、鳥羽へ、明けてぞ著き給ふ。故大納言殿の山莊、すあま殿とて、鳥羽にあり。それに立ち寄り見給へば、住みあらして、年經にければ、築地は在れども、れひもなく、門はあれども、扉もなし。庭に立ち入り見給へば、人迹絶えて、苔深し。池のほとりを見まはせば、秋の山の春風に、白波、頻に、織りかけて、紫鴛白鷗、逍遙す。興ぜし人のこひしさに、たゞ、

盡きせぬものは、涙なり。家はあれども、欄門破れて、蔀、遣戸も、絶えてなし。「こゝには、大納言の、とこそれはせしか。この妻戸をば、かくこそ出で入り給ひしか。あの木をば、みづからこそ植ゑ給ひしか」など、いひて、言のはにつけても、たゞ、父の事をのみ、戀しげにこそ宣まひけれ。

三月、中の六日なれば、花は、いまだ、なごりあり。楊梅桃李の梢こそ、折志り顔に、いろいろなれ。昔の主人はなけれども、春を忘れぬ花なれや。少將、花のもとに立ち寄りて、

桃李不言春幾暮。烟霞無迹昔誰栖。（菅原文時作）

故里の、花のものいふ、世なりせば、

いかにむかしの、ことを問はまし。（古今雜）

この、古き詩歌を、口ずさみ給へば、康頼入道も、折ふし、あはれに覺えて、墨染の袖をぞ濡しける。暮るゝほどは待たれけれども、餘に、名殘をしくて、夜更くるまでこそはしけれ。更け行くまゝに、荒れにたる宿のならひとて、古き軒の板間より、洩る月影ぞ、隈もなき。鷄籠の山、明けむとすれども、家路は、更に、急がれず。さてしも、あるべきことならねば、迎に、乘物どもつかはして、待つらむも、心なしとて、少將、泣く泣く、すあま殿を出でつゝ、都へ歸り上られけり。人々の心のうち、さこそ、うれしくも、また、哀にもありけめ。

康頼入道が迎にも、乘物はありけれども、今更、なごりの惜しきにとて、それには乘らず、少將の車の尻に乘りて、七條河

原までは行き、それより、行き別れけるが、猶、行きやらざりけり。花の下の半日の客、月の前の一夜の友、旅人が、一村雨の過ぎ行くに、一樹の蔭に立ち寄りて、別るゝなごりもをしきぞかし。況や、これは、憂かりし嶋のすまひ、船の中、波の上、一向、所感の身なれば、先世の芳縁も淺からずや思はれけむ。

少將は、もとの如く、院へ參らせ給ひて、宰相の中將まで上り給ふ、康賴入道は、東山雙林寺に、わが山莊のありければ、それに落ち著きて、まづ、かくぞつゞけける。

ふるさとの、軒の板間に、苔むして、
　れもひしほどは、洩らぬ月かな。

やがて、そこに籠居して、憂かりし昔を思ひやり、寶物集といふ物語を書きけるとぞ聞えし。（平家物語）

三、自然のあはれ二篇

一、月と露

よろづの事は、月見るにこそ慰むものなれ。ある人の、「月ばかり、れもおろきものはあらじ」と、いひしに、またひとり、「露こそ、あはれなれ」と、爭ひしこそをかしけれ、折に觸れば、何かは、あはれならざらむ。月花は、更なり、風のみこそ、人に、心はつくめれ。岩に碎けて、清く、流るゝ水のけしきこそ、時をもわかず、めでたけれ。「沅湘、日夜、東に流れ去る、愁人のためにとゞまる事、おばらくもせず」と、いへる詩を見しこそ、あはれなりしか。

嵇康も、山澤に遊びて、魚鳥を見れば、心たのしぶといへり。人遠く、水草清き所にさまよひありきたるばかり、心慰む事はあらじ。（徒然草）

一一、花と月

花は、さかりに、月は、隈なきをのみ見るものかは。雨にむかひて、月を戀ひ、垂れ籠めて、春のゆくへ知らぬも、なほ、あはれに、なさけ深し。咲きぬべきほどの梢、散り萎れたる庭などこそ、見所れほけれ。歌の詞書にも、「花見にまかりけるに、はやく、散り過ぎにければ」とも、「障る事ありて、まからで」なども、書けるは、「花を見て」といへるに劣れる事かは。花の散り、月の傾くを慕ふならひは、さる事なれど、殊に、かたくなる人ぞ、「この

枝、かの枝、散りにけり。今は、見所なし」などはいふめる。よろづの事は、始終こそをかしけれ。望月の、くまなきを、千里の外まで眺めたるよりも、曉近くなりて、待ち出でたるが、いと、心深う、青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる、木の間の影、うちまぐれたる、むら雲がくれのほど、又なく、あはれなり。椎柴、白樫などの、濡れたるやうなる葉の上に、きらめきたるこそ、身にしみて、心あらむ友もがなと、都こひしう、覺ゆれ。すべて、月花をば、さのみ、目にて見るものかは。春は、家を立ち去らでも、月の夜は、閨の内ながらも思へるこそ、いと、たのもしう、をかしけれ。（徒然草）

四、法性寺忠通

法性寺のれとゞは、富家の入道れとゞの御子にれはします。四代のみかどの關白にて、ふたゝび、攝政と申しき。昔も、いと、たぐひなきことにこそ侍りけめ。れほきれとゞにも、ふたたび、なり給へりし、いと、ありがたく侍りき。藤氏の長者妨げられ給ひしも、左のれとゞの、事にあひ給ひしかば、保元元年七月に、更に、還りならせ給ひにき。同じ三年八月十六日、二條のみかど、位に卽かせたまひし時、今の殿の御兄にれはしまし、右のれほいまうちぎみに、關白讓り聞えさせ給ひて、大殿とて、れはしまししに、應保二年に、御ぐしれろさせ給ひてき。御年六十六とぞ承りし。長寛二年二月十九日、六十八と聞

えさせ給ひし年、かくれさせ給ひき。

昔、まだ、幼くれはしまししし時、春日の祭の使、せさせ給ひしに、內侍周防の御、參りて、行事、辨、爲隆に申しれくりける。

いかばかり、神も嬉しと、みかさ山、
ふたばの松の、千代のけしきを、

そのかへしは劣りたりけるにや、聞えはべらざりき。祈り奉りたるまゝるしありて、めでたく、久しくせさせ給ひ、法性寺の御堂の御所など造りて、貞信公の御堂のかたはらに住ませ給ひしかば、法性寺殿とぞ申すめる。昔より、攝政關白、續きてれはしませど、身の御才は、儒なくれはしましき。才學も、優れてれはしましける上に、詩など作らせ給ふことは、いにしへ

の宮、帥殿などにも劣らせ給はずやれはしけむ。歌詠ませ給ふことも、心たかく、昔のあとをねがひ給ひたるさまなりけり。管絃の方、心にとめさせ給ひて、箏のことを、むねと、御遊などにも彈かせ給ふとぞ聞き侍りし。

手書かせ給ふことは、昔の上手にも恥ぢずれはしましけり。眞名も、假名もこのもしく、今めかしき方さへ添ひて、勝れてれはしましき、内裏の額ども、ふるきをばうつし、失せたるをば、更に、書かせ給ふとぞ承りし。院、宮の御堂、御所などの色紙形は、いかばかりかは、多く、書かせ給ひし。御願よりはじめて、寺々の額など、數知らず、書かせ給ひき。横河の華臺院などは、古き所の額も、むかへ講勤めける聖の申したるとて、書かせ給へりとぞ、山の僧は申しし。

また、幼くれはしましし時より、歌合など、朝夕の御あそびにて、基俊、俊頼などいふ、時の歌よみどもに、人の名匿して、判ぜさせなどせさせ給ふ事、絶えざりけり。御歌など、多く、聞き侍りし中に、

わたの原、こぎいでて見れば、久方の、
雲井にまがふ、わきつ志らなみ。

など、詠ませ給へる御歌は、人麿が、「嶋がくれゆく、舟をしぞ思ふ」など、詠めるにも恥ぢずやあらむとぞ、人は申し侍りし。

よし野やま、みねの櫻や、さきぬらむ。
ふもとのさとに、にほふはる風。

など、詠ませ給へるも、心も、詞も、妙にして、金玉集などに選び載せられたる歌のつらになむ聞え侍るなる。からの文作らせ給ふ事も、かくぞありける。されば、ふみの心ばへ知らせ給ふ事、深くなむ、はしける。白河院にも、三卷の詩、選びて、上り給ひ、基俊の君にも、からやまとの、をかしき言の葉どもをぞ選びつかはさせ給ひける。また、作らせ給へる、からの詞ども、御集とて、唐の白氏の文集などの如くに、事好む人、もてあそぶとぞ承る。（今鏡）

五、比良の山風

花の歌とて、よみ侍りける、　左近中將良經

さくらさく、比良の山風、ふくまゝに、
花になりゆく、志賀のうらなみ。

擣衣

源　俊頼朝臣

松かぜの、れとだに秋は、さびしきに、
ころもうつなり。たまがはの里。

心のほかなることありて、知らぬ國に侍りける時、よめる、

平　康頼

さつまがた、沖の小嶋に、われありと、
れやには告げよ。八重のしほ風。

月の歌十首よみ侍りける時、　藤原家基

さ夜千鳥、ふけひの浦に、れとづれて、

ふじまがいそに、月かたぶきぬ。

（千載和歌集）

花のうたとて、よみ侍りける、　西行法師

吉野山、こぞのしをりの、みちかへて、
まだ見ぬかたの、花をたづねむ。

關路花を、　宮内卿

あふさかや、木末の花を、ふくからに、
あらしぞかすむ。せきの杉むら。

百首歌よみ侍りけるに、　藤原定家朝臣

見わたせば、花も紅葉も、なかりけり。
浦のとまやの、あきのゆふぐれ。

湖上冬月　藤原家隆朝臣

志賀の浦や、遠ざかり行く、浪間より、
こほりていづる、ありあけの月。

定家朝臣の母、身まかりて後、秋ごろ、墓所近き堂にとまりて、よみ侍りける、　皇太后宮大夫俊成

まれにくる、夜半もかなしき、松風を、
たえずや苔の、またにきくらむ。

初瀬に詣でける道にて、　禪性法師

初瀬山、ゆふこえくれて、宿とへば、
三輪の檜ばらに、秋かぜぞふく。

（新古今和歌集）

中納言
平清盛ノ子ニテ平
知盛ト号ス
文治元年壇浦ニ
戦死ス

六、壇の浦その一

さるほどに、源氏の兵ども、いとゞ、力を得て、平家の船に、漕ぎ寄せ、漕ぎ寄せ、亂れ乘る。遠きをば射、近きをば斬る。たて横、散々に攻む。水手、かんどり、櫓を棄て、櫂を捨てて船を直すに及ばず、射伏せられ、切り伏せられ、船底に倒れ、水の底に入る。中納言は、女院、二位殿などの乘り給へる御船に參られたりければ、女房たち、「こは、いかに、なり侍りぬるぞ」と、宣ひければ、「今は、ともかくも申すに、ことば足らず。かねて、思ひ設けし事なり。めづらしき東男どもをこそ、御覽ぜむずらめ」とて、うち笑ひ給ふ。手づから、船の掃除して、見ぐるしきものども、海に

取り入れ、「こゝ拭へ、かしこ拂へ」など、のたまふ。「さほどの事になり侍るなるに、おづかなるたはぶれ言かな」とて、女房たち、聲々、をめき叫び給ふ。

二位殿は、今はかぎりと見は。て。給ひにければ、練色の二衣、ひきまとひ、白袴のそば、高く、挾みて、先帝を抱き奉り、帶にて、わが身を結びあはせ參らせ、寶劍を、腰にさし、神璽を、脇に挾みて、ふなばたに臨み給ふ。先帝は、八つにならせ給ひけり。御年のほどよりは、ねびとゝのほらせ給ひて、御形、あてに、うつくしく、御髮、黑く、ふさやかにして、御背にかけ給へる御貌、たぐひなくぞ見えさせ給ひける。御心迷ひたる御氣色にて、「こは、いづこへ行くべきぞ」と、仰せられけるこそ悲しけれ。二位

内侍司
尚侍（カミ）、典侍（スケ）、掌侍（ジヤウ）。

殿は、「兵どもが、御船に、矢を参らせ候へば、別の御船へ、行幸なし参らせ候ふ」とて、

いまぞ知る。みもすそ河の流には、
浪のあたにも、みやこありとは、

と、宣ひもはてず、海に入り給ひければ、八條殿、同じく、つゞきて、入り給ひにけり。國母建禮門院をはじめ奉りて、先帝の御乳母帥典侍、大納言典侍、以下の女房たち、船の艫舳に臥しまろび、聲をとゝのへて、叫び給ふもれびたゞし。浮きや上らせ給ふと、あばしは見奉りけれども、二位殿も、八條殿も、深く、沈みて、見え給はず。昔は、一天の主として、殿をば長生と祝ひ、門をば、不老と名づけしかども、今は、雲上の龍下りて、忽に、海中の鱗となり給ふこそ、悲しけれ。あはれなるかな、花に喩へし、十善の御粧、無常の風に、匂を失ひ、悲しいかな、月にかゞやきし、萬乘の玉體、蒼海の浪に、影を沈めはすることを。無常、もとより、さだめなし。有待、誰かは、たのみあるなれども、清涼、紫宸の玉臺を振り捨てて、闘戰兵革の船中に行幸して、いまだ、十歳にだにも滿じ給はぬ御齢に、忽に、波の底に入り給ひけむ、あはれといふもれろかなり。

女院は、後れ奉らじと、御燒石と御硯の箱とを、左右の御袂にやどし入れ、御身を重くして、つゞきて、海に入らせ給ひけるを、渡邊源次郎兵衛番が子に、源五馬允昵といふもの、いそぎ飛び入りて、かづきあげ奉りけるを、昵が郎等、熊手を下し

て、御髪をから巻きて、御船へ引き入れ奉る。やよひの末の事なれば、藤重の十二ひとへの御衣を召されたり。翡翠の御髪よりはじめて皆、ほたれはしますぞ、御いたはしき。昵は、もしやの時とて、鎧唐櫃の底に持たりける、唐綾の白小袖、一重、取り出して、女院に參らせたりけるは、えびすなれども、なさけあり。昵は、近くは參り寄らず、程を隔て、畏りて、「君は、女院にてわたらせれはするか」と、度々、たづね申しければ、御覽じなれぬえびすのありさま、おそろしく、思し召しけれども、御ことばをば出させ給はず、二度、うちうなづかせ給ひけり。

七、壇の浦 その二

源氏の郎等に、後藤三範綱は、平家の船に飛び入りて、弓をば捨て、打物拔いて、走り回りけるを、越中次郎盛嗣、寄せ合はせ、組んで重り、上になり、下になり、船中を、五ころび、六ころびしければ、互に、刀を拔く隙もなかりけるところに、盛嗣を助けむとて、惡七兵衞景清、範綱をば刺してけり。前能登守教經は、元來、心剛に、身健にして、進む事ありて、退く事なし。軍敗れぬと見えければ、思ひ切り、死生知らずに、振舞ふ。これぞ聞ゆる能登守とて、われ先に、われ先にと、爭ひて、かゝりけれども、少しも、面も振らず、戰ふ。矢頃に廻る者をば、さしつめ、さしつめ、射けるに、更に、あだ矢なし。近づくものをば引き寄せ、提げて、海へ投げ入れければ、面を向け難し。

前新中納言知盛卿、これを見て、「よしなき事を給ふものかな。このともがらは、皆、歩兵にこそ侍りぬれ。あながちに、目に立て給ふべきにあらず。自害をもせ給へかし」と、宣へば、さては、九郎冠者に組めとにこそ。それは、存ずるところなり。いかがはせむと伺ひ回るところに、判官の船と、能登守の船とすり合はせて、通りけり。能登守、然るべしとて、判官の船に乗り移り、兜をば脱ぎ棄て、大童になり、鎧の袖、草摺ちぎり捨て、軽々と、身をもたゝめて、いづれ、九郎ならむと馳せめぐる。判官、かねて、存知して、とかく、違つて、組まじ、組まじと紛れ行く。さすが、大將軍と覺えて、鎧に、小長刀突いて、武者一人あり。能登守、目をかけて、「軍將、義經と見るは、僻目か。故太政入道の弟、門

脇中納言教盛の二男に、能登守教經」と、名乗り、にこと、笑ひて、飛びかゝる。判官は、組んではかなはじと思ひて、尻足踏んでぞやすらひける。大將軍を組ませじとて、郎等どもが、立て隔て、立て隔てもけれども、「除けや、つばら、ものもの」とて、海の中へ踏み入れ、取り入れ、つと寄る。既に、組まむともければ、判官、早業、人にすぐれたり、小長刀を、脇に挾み、さしくゝりし、弓だけ二つばかりなる鄰の船へ、つと、飛び移り、長刀取り直して、ふなばたに、にこと、笑ひて、立ちたりけり。能登守は、力こそすぐれたりけれども、早業は、判官に及ばねば、力なくして、船に留り、「あゝ、飛びたり、飛びたり」と、ほむ。その後、能登守、今をかぎりと狂ひ回りければ、面を向け難し。こゝに、安藝太郎時家

といふものあり、阿波國の住人、安藝大領といふものが子なり。三十人の力もちたりと聞ゆ。郎等二人あり。同じく、三十人づつ、力あり。時家、二人の郎等にいひけるは、「吾等三人、心を一つにして、組まむには、鬼神といふとも負くまじ。能登殿、強しといふとも、やは、三人には勝ち給ふべき。三人取つて合はすれば、九十人が力なり。わたくしの力業は、人の證據に立たず。能登守に組んで、力をも、人に知らせ、剛の名をも極めむと思ふは、いかに」と、いへば、郎等ども、「仔細にや及ぶべき」とて、三人、一度に、鐙を傾け、打つてかゝる。能登守は、源氏の郎等に、名もあり、力もあればこそ、教盛にはかゝるらめ。これぞ、軍の最後なると思ひければ、志づ志づと、相待つところに、三人、鼻をならべ、すきまもなく、つと寄る。一人をば、海中へ、たうと、蹴入れ、二人をば、左右の脇にかい挾んで、一志め、志めて、「いざ、われら、教經が御伴申せ。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛」とて、海の底へぞ沈みける。

前平中納言教盛、同新中納言知盛は、一所にれはしけるが、伊賀平内左衞門を召されて、「いかに、家長、見るべき事は見つ。先帝をはじめ參らせて、一門の人々、自害し、海に入りぬ。今までも、かくあれば、つれなき命を惜むに似たり。大臣殿は、いかに、なり給ひぬるやらむ」と、問ひ給ふ。家長、涙を流して、「大臣殿、右衞門督殿二人は、一度に、海に入り給ひたりつるを、敵、熊手にかけ奉りて、二所ながら、引き上げ、取り參らせ候ひぬ」と、申

しければ、知盛卿は、「あな心う、など、深くは沈み給はざりけるぞ」と、二度、のたまひて、涙を、はらはらと、流して、「今は、何をか見聞くべき。家長、日ごろの約束は、いかに」と、仰せられければ、「今更、君に離れ奉りて、いづちへ行くべきに候はず。御伴なり」と、申せば、知盛卿、世に、うれしげに思ひて、平中納言教盛卿と、鎧脱ぎ捨てて、西に向ひ、念佛申して、兩人自害せられければ、有國、家長以下、侍八人、同じ枕に自害して、伏しぬ。「あはれ、この人に、世を讓りたらば、たとひ、運のきはみなりとも、都にて、いかにもなり給ひなまし」と、惜まぬものはなかりけり。

赤旗、赤符、海上に充ち滿ちて、紅葉を、風に吹き散したるが如し。海水も、血に變じて、渚々に寄する波、薄紅にぞ流れける。

主を失へる船は、風に隨ひ、潮に引かれて、越路の雁の、行を亂るが如く、膚を離れたる衣は、水に浮き、波にあらそうて、蜀江の、錦の色を洗ふかと疑はる。玉樓金殿の昔の榮華、船中の浪の底、今のありさま、思ひならべて、あはれなり。（源平盛衰記）

八、漁村

あまの住家ばかり、あはれなるものはなし。いと、便なき海邊の、風もたまらぬ松蔭などに、たゞ、かりそめに、造りたる藁屋どものさま、浪うち寄せなば、やがて、流れも失せぬべう、いと、はかなげに見ゆるを、繪に書きすさびたるなどは、なかなかに、をかしきものから、さて、住みなば、なに心地かせましと、

思ひやるだに、心細し。夕つかたなど、年老いたる男子の、手がらみしたるが、磯邊に立ちて、「今日は、いと、遅くもあるかな」など、いひつゝ、沖の方をまぼり居り。うまごどもにやあらむ、眞砂の上を走りありきつゝ、遊び居たるに、入日さしたる嶋かげより、三つ二つ、歸り來る舟の、檝ひきをりて、ほこらしげなるを、老人、待ちえ顔に、うちほゝ笑みたるは、さち多かりしにやと見ゆ。汀に寄せて、飛び下るゝまゝに、綱繰り寄せなど、とかくしつゝ、のゝしるに、男も、女も、あまた、いで來て、大なる籠に、魚ども取り入れつゝ、擔ひもて行くさま、さはいへど、にぎはしげなり。くゞつめく物もて來て、ちひさき魚、三つ四つ、こひもて行く童などもあり。すべて、人れほく、立ちこみ騷ぎて、

舟のあたり、かしがましく、さし寄りて、のぞくべうもあらず。いと、長き網の、渚にかけ干したるを繰りためて、取り入れなど、やうやう、ゑづまりゆけば、こなた、かなた、火ともしたるすき影、壁もあらはにて、いと、あはれに、見ゆ。夜、やどりて、見れば、浪風の響、枕をゆすりて、つゆ、まどろまれず。曉がた、鄰の家々、目さまして、なりはひの事どもなるべし、あやしう、聞き知らぬ事どもを、れのがじし、聲高に、いひかはしたる、げに、あまのさへづり、めづらしうも。をかしうも。（中島廣足著櫃園文集）

九、氣候風 その一

氣候風の、我が日本に、關係あるや、甚だ深し。その氣候、その

風景、その生業、産物、はた、國民の氣風、若くは、その習慣、風俗等、悉く、その影響、風化を被らざることなし。獨、我が國のみならず、氣候風の流行する亞細亞各地は、皆、齊しく、同一の影響を受け、志かも、その風化の傾向は、殆ど、同一轍にして、世に所謂、亞細亞風といふものを養成するに至れり。故に、亞細亞風とは、即ち、氣候風にして、亞細亞諸國は、即ち、氣候風諸國と換言するも、亦、不當ならざるに似たり。

抑も、氣候風とは、ある期節にれいて、吹きはやる、一種の特風なり。我が國にては、毎歳、夏期に及べば、西南方位より吹き來る定風にして、今や、吾人が浴しつゝある風なり。この風や、氣候の寒暖に應じて、その方位、變更するを以て、氣候風の名

言語のなまること
よしふまり。

を與へられ、或は、暑候の半年は、西南より吹き、寒候半年は、殆ど、その反對より吹く風なるを以て、半年風とも稱せらる。又、その交代するや、曾て、期節を誤らざるを以て、信風の名あり。又、モンスーンとも稱するは、もと、亞刺比亞語の、歳の一部を意味せる期節、或は、氣候の意義なるモオンシムより轉訛せしものにして、さるは、亞刺比亞地方に於いて、最も、著しく、この風を感ずるを以てなり。

氣候風の流行する場所は、亞刺比亞海、及び、印度洋附近を以て、最も、顯著なる範圍とし、延いて、北太平洋、及び、日本海の南部に及べり。地方を以て云へば、西は、阿非利加東岸より、亞刺比亞、印度各地、東は、支那東南岸より、日本の西南部の海岸

海面に及べり。

西南氣候風は、蒸發盛なる印度洋上を吹掃し來るが故に、濕氣を含むこと、頗るれびたゞしく、北方に進みて、陸地に近づくに隨ひ、漸く、凝集を始め、黑雲、重積して、電光、雷鳴、交も起り、陸地に入りて、遂に、沛然たる大雨をふらすべし。これを、風位の、西南に變更する際、即ち、五六月の交とす。これ所謂、梅雨なり。

梅雨は、印度、支那、日本を始め、南亞細亞地方、所謂、米產地の稻作を助くる恩雨にして、この霪霖あるがために、南亞細亞第一の富源たる、夥しき稻禾を涵養せり。若し、この恩雨無かりせば、養水缺乏して、挿秧するを得ず、又、稻禾を養ふことを

得ざるべし。然るに、時、挿秧の頃に及べば、西南風は、梅雨を齎し來りて、充分なる養水を供給し、稻禾、既に、長じて、水を要せざるに及べば、梅雨も、亦、霽れて、土用の炎暑となりて、稻を養成するは、漫然、造化の妙用と謂はば言へ、一に、氣候風の德澤と謂はざるを得ず。その證左には、米產地は、氣候風流被の範圍に限れるによりて、知り得べし。故に、南亞細亞は、米產地にして、その人民は、米食種なり。米食種なるが故に、人體の色素は、黃色なりとまで、立言する人あり。然らば、すなはち、氣候風の影響は、亞細亞風、＝米產地、＝米食種、＝黃色人種といふ關係をなすべくや。

一〇、氣候風その二

氣候風は、溫暖の濕風なれば、頗る不快なり。北西の冷風より、この風に代れば、氣溫、俄にたかまり、濕氣の多きため、身體の不調和を感じ、心氣、亦、活潑を缺き、解體遊惰の狀となるべし。これを、わが、冬期の國民と、夏期の國民との狀態によりて、徵せよ、殆ど、別國民の觀あるべし。勿論、これ等の現象は、氣候風の作用のみと謂ふを得ざれども、夏期をして、永からしめ、且、蒸煩ならしむるは、確に、氣候風の作用なり。氣候風の及ぶ所、衣は、嚴正なる服に堪へず、輕薄にして、寬闊なるを用ゐ、食は、膏味なる動物性を採らずして、淡泊なる植物質を要し、居は、防寒よりも、寧ろ、暑熱を避くべき、通風自在の建築とし、勤

勞して、生活の高からむよりは、寧ろ、放逸にして、貧窶の狀態に安んずるが如き、氣候風國、滔々、皆、然らざるはなし。氣候風の、最も流行する印度、暹羅、亞剌比亞、安南等は、殊に、悉く、この風化を蒙り、遊惰放逸は、遂に、國風となり、彼が如き狀態に陷るに至れり。氣候風國民は、すべからく、用意する所なかるべからず。

若し、我が國をして、他の亞細亞各地の如く、氣候風期をして、今少し、永からしめむか、國民の氣質は、薄弱となり、非劣となり、勤勉力は、その幾多を減じて、國運逡巡すること、恐くは、他の亞細亞諸國と、一般なるべし、幸にして、この風期は永からずよし、一時は、遊惰放逸、百業、なかば、休止の狀態を呈すれ

ども、たちまちにして、金風、梧葉をうごかし來れば、心身爽快となり、ふたゝび、前途多望なる事業の進程にのぼる勇氣を回復するを得るは、これ、實に、我が國の、東洋先覺國たる所以ならむ。

れよそ、氣候風の如き、無形の天然力が、人事に及す勢力は、實に、意外に、强大なるものなりと雖も、その影響は、目、直に、これを視るを得ず、又、耳、直に、これを聽くを得ず、只、冥々の裡、微妙の間に働くを以て、人の注意を惹くこと、適切ならざるが如し。然れども、すべて、天然の勢力に圍繞せらるゝ人事は、皆、天然の作用に風化せられ、その慣習、風俗等を養成せらるゝことを思はざるべからず。すなはち、かの漁民の性質の、慓悍にして、農民の、素朴なるを見よ。また、平原住民の、濶達にして、山地住民の、偏狹なるを見よ、更にまた、何の故に、歐洲に侵入せしアーリア種族が、剛毅果斷にして、山をも海をも呑むべき大氣宇をそなふるにかゝはらず、印度に移れる同種族は、柔懦怯臆にして、二億七千餘萬の人民を有しながら、僅々、十餘萬の英人に征服せられしかを考究せよ。皆これ、天然の、人事にれよぼせる勢力を證するにあらずや。されば、我が國に流行する氣候風といふ一時風、亦、教育家一顧の値なきにあらざるべし。（矢津昌永著地理學小品）

一一、開國の氣運

我が日本の、外交を拒絶して、獨、和蘭の通商を許し、二百餘年、內外の關係を絶ちたるは、主として、內地の政略によれりと雖も、海外の形勢も、亦、これを助成したりしによる。物は、外形變ずれば、內容も、亦、隨ひて、變ぜざることを得ず。近世、宇內を一變したる動力は、その源を、歐洲の疆域に發したりき。即ち、コロンブスが、米洲を發見してより、西班牙、和蘭、佛蘭西、英吉利の諸國、爭ひて、この大陸を經營して、殖利、戰爭、ともに、專ら、この一方に在りき。然るに、バスコ、ダ、ガマが、喜望峯を回航してより、東亞の諸國も、亦、歐人の、經營侵略の場となりにき。これ、實に、我が足利氏の中葉にあたりぬ。元來、米洲の一方は、無人の大陸を拓くことなれば、人寡く、地廣く、經營に、多年を

要したれども、東方に向へる者は、非常なる速度を以て、直に、印度より、沿海の諸港を經、又、南洋の諸嶋を略して、安南、支那より、我が日本に到れり。當時、海上に、勢力を有せしは、西班牙、葡萄牙の二國なりしかば、日本に來れる者も、この二國の人、甚だ、多かりき。繼ぎて、蘭人來り、又、英人來りしが、西、葡二國人は、その本國の勢力の、衰微に赴きし頃より、我が國より、驅逐せられ、英國は、君民の爭鬪よりして、一旦、共和政治を行ふに至れる、多年の內亂あり、又、ジェームス二世の出奔せる革命あり、さかのみならず、米洲、及び、印度の二地は、その全力を盡すとも、猶、足らざるべく覺ゆる大陸廣土たるが故に、勢、他邦の經略に遑あらざりき。これ、蘭人が、日本に向ひて、久しく、獨

占の利を有したる一因にして、敢て、內地の政畧の如何に、よれるにあらざりしなり。

爾來、西歐諸國には、數回の戰亂ありき。米國の獨立より、延きて、佛國の革命に及び、海陸の戰鬪、各地に起り、貿易は衰替し、遠略の計も、亦、中絕の姿なりしに、ナポレオン、擒に就きて、全洲小康を得、又、汽船の發明ありしが爲に、遠洋も、比鄰と變じたれば、嚮に、戰鬪に注ぎたりし心意一轉して、爰に、再び、遠略の計をなせり。即ち、英人は、既に、米洲の大陸を失ひて、一意に、印度に盡力し、佛國も、亦、東洋に、手を下すこととなり、又、露國は、その勢を、歐洲に振ひ、尋いで、東方に、意を用ゐるに至り、その、我が北疆に接する故を以て、早くも、我に交通して、東洋

に、進退の便を得むとせり。これ、文化年間、露使の、我に、通信を請ひ、英船の、屢、我が沿海に出沒したりし所以なり。

又、一方を顧るに、米洲の大陸は、大民主國勃興し、國運駸々として、長足の進歩を爲し、カリフォルニアの金坑を發見してより、その沿岸の殖民により、我が國と相對する桑港は、繁榮の地と變じ、太平洋は、諸國船舶の、頻繁に、往來する所となり、特に、米船の、捕鯨に從事する者は、日本の近海に來りて、往々、難破の厄に遭ひ、又、薪水の急を告ぐることありて、日本の岸に近づけども、なほ、救助を受くること能はず。また、これより以前、千七百八十五年より、千八百四十年の頃に至るまで、黑潮に漂ひて、米洲に著せる、わが難船、五十餘隻ありて、多く

は、合衆國人に救助せられたりき。而して、便船に託して、これを、日本に送りたるが、日本は、これを受けずして、却つて、その船を砲擊するに至れり。これらは、合衆國政府が、日本の開港を促したる原因にして、千八百四十八年に、リッドル提督、軍艦二隻を率ゐ、日本に、通商を求めて、許されざりしが、その後、米國の、益、開くるに隨ひ、愈、この念に長じ、遂に、ペルリ提督を派遣するに至りしなり。

この時、支那は、既に、各國に迫られて、港灣を開き、戰敗の餘、香港も、亦、英の有となり、諸國の商民、この國に輻輳したるが故に、日本の港灣は、露の、北より來りて、これを開くにあらざれば、英、佛、西よりして、これを開くべく、何れにせよ、我が對外政略を一變せざるべからざる機運に際會したるものにして、蘭人も、亦、夙く、この大勢を察し、自國獨占の利を永續すべからざることを熟知したるが故に、自國のため、又、日本の爲に、開國の忠告を爲したりき。天保十四年、和蘭國王より、我が幕府に贈れる書に、英兵、支那を侵せる始末を述べ、且、いはく、「貴國も、亦、かくの如き災害に罹らむとす、云々。謹んで、古今の時勢を通考するに、天下の民は、速に、相親む者にして、その勢は、人力の、能く、防ぐべきに非ず、云々」と、いへり。この書は、後年、ハリスが、支那再度の亂を告げて、我に、訂約を促したると、精神を同じくせしものなり。嗚呼、遂に、我が日本を開けるものは、兵を好む歐洲の國にあらずして、平和を、國是とせる合衆

國なりしことは、我が國のために、甚だ、幸福なりきといふべし。（島田三郎著開國始末）

一二、豐公征明論

豐臣關白が、朝鮮を討ちしは、朝鮮を取る意に非ずして、明國を取らむとするなりき。さらば、これ、實に、一大擧にして、東、小田原を討ちて、北條を亡し、西、嶋津氏を攻めて、これを降すに比すれば、その大小強弱の懸隔、いと、大なりといふべし。れよそ、事權の一ならざるは、兵の大害なり。且、兵は、活機なれば、その變化、一日にして、變ずることもあるべし。さからむには、その大將の號令指揮、その當を得ると、然らざるとによりて、

勝敗利鈍の數、實に、測るべからず。關白、何のゆゑに、浮田秀家の如きものを、主將とし、これに、先鋒たらしむる者に、殊に、そのなか睦しからざる加藤、小西を以てせしか。兵は一致せざれば、そのはたらき、自在ならず、百萬の衆あれども、一致の和を缺く時は、一隊一軍の用をなすのみ。彼を危み、これを忌みて、前後進退の便を失ふこと、あげて、數ふべからず、全軍、覆滅の災厄を招かずんば、殆ど、幸ならむ。さかるに、漫然として、これを用ゐしは、何ぞや。關白、すでに、小田原の役にも、みづから、將となり、薩摩の役にも、みづから、出陣せしにあらずや。況や、明を征し、その大軍を破らむとするに、諸將にのみ委託して、みづから、出でざるは、これ、第一著に、その軍機を誤りしもの

といふべし。

關白、もし、出てずば、必ず、時の人望ある、雄略一世をおほふものをもてすべし。さらば、その人は、如何。德川家康、その人なるべし。家康、ひとたび、海を渡りて、諸將を指揮するほどならば、加藤、小西、いかで、その命に從はざらむ。諸將、一致の勢をもて、朝鮮を打ち平げ、明の境に臨み、四百餘州を蹂躪せむに、何の難か、これあらむ。

又、こゝに、一策あり。兵は、必ず、兩道を衝くべし。兩道とは、何ぞ。一軍は、平壤より、遼東に出でて、北京を衝くべし。一軍は、水軍にして、かの、昔、倭寇といはれし者どもにて、天草、西肥の海岸にある浪士、よし、さからずとも、有土の諸將の部下にて、曾

て、倭寇の手につきて、明國東南の海岸を跋渉せしもの多からむ、それらの軍士を募りて、上海、厦門、浙江、廣東等の要害を衝くべし。この頃、明人等、倭寇と聞く時は、鬼神の如く、懼れれのゝきしものなり。さらば、吾が軍は多からずとも、又、かの土人等が、我に加擔して、內應するもの多かるべし。かくする時は、明國、南北に、大敵を受けて、いかで、十分の力を盡すことを得べき。我が師、北京をつかむこと、實に、難しとせず。

家康、すでに、朝鮮の地より、北京に向ひしと聞かば、關白、はやく、朝鮮に入るべし。日本全國の力を擧げて、向ひたらむには、などか、北京を拔かざることあらむや。さかして、城下の盟を爲し、朝鮮、遼東の地を、我が物とするか、又は、南方の要港を

取りて、我が兵を屯住せしめ、永世、日本の所屬とするかにれいては、明國を征服せむこと、決して、難きにあらず。

關白、この策に出づるを知らず、その身、日本に安坐して、動かず、秀家の如き、乳臭の輩を、大將とまたるが爲に、事權重からず、委任輕く、諸將の聲望を維持するに足らず、終に、數百萬の糧食と、數萬の兵士とを費して、一寸の地も、我が有とすること能はざりき。實に、惜むべきの甚しきにあらずや。成敗の迹、かくの如し。これ、唯、昔日の談のみならむや。兵を用ゐるものは、宜しく、猛省する所あるべし。（依田百川）

一三、桶峽（中村秋香）

あやめ里白

轟くいかづち篠つく雨、あやめもわかぬ闇の夜を、神の助と岨づたひ、轡を包み草摺卷きて、攻め入る必死の三千騎。

沓懸、大高、笠寺の、野にも山にも充ち滿ちたる、四萬五千の駿河の軍勢、明日は清洲を攻めれとし、決河破竹のいきほひにて、尾張の國を定めむと、心れごりの酒宴。

松の嵐は琴のまらべ、なるかみのれとは鼓のひゞき、よにこゝちよきゆふべやと、佩きつる太刀の緒打ち解けて、歌ひつ舞ひつ興も夜も、いとたけなはなるをりしもあれ、

四面にれこる鬨の聲、すは夜討ぞといはせもあへず、雨よりまげき寄手の槍先、嵐をまくかたきの太刀風。

天たちまち覆り、地みるみる裂け、きらめく稲妻光のひま

に、二千餘人の玉の緒は、草葉の露と消えにけり。

あゝ定めなき人の世や、たのまれぬ人の身や。さもいかめしく轟きし、名はたゞ夜はのはたゝがみ、夢の名殘の松風も、昔の迹や尋ぬらむ。五月雨さむき桶峽。

一四、鉢の木　その一

ゆくへさだめぬ道なれば、來し方も、何處ならまし。「これは、一所不住の沙門にて候ふ。我、このほどは、信濃の國に候ひしが、餘に、雪深くなり候ふほどに、まづ、この度は、鎌倉に上り、春になり、修行に出でばやと思ひ候ふ。信濃なる淺間の嶽に立つ煙、遠近人の袖寒く、吹くや嵐の大井山、捨つる身になき友の里、今ぞ浮世を離れ坂、墨の衣のうす氷川、下す筏の板鼻や、佐野の渡に著きにけり。

「急ぎ候ふほどに、上野國、佐野のわたりに著きて候ふ。あら笑止や、また、雪の降り來りて候ふ。此所に、宿を借らばやと思ひ候ふ。「いかに、この家のうちへ、案内申し候ふ。「誰にてわたり候ふぞ。「これは、修行者にて候ふ。一夜の宿を、御貸し候へ。「やすき御事にて候へども、主人の御留守にて候ふほどに、御宿はかなひ候ふまじ。「さらば、御歸宅まで、これに待ち申さうずるにて候ふ。「それは、ともかくもにて候ふ。われらは、外面へいで迎へ、この由を申さばやと思ひ候ふ。

「あゝ、降つたる雪かな。如何に、世にある人の、面白う候ふら

むそれ、雪は、鵝毛に似て、飛んで散亂し、人は、鶴氅を著て、立つて徘徊すと云へり。されば、今、ふる雪も、もと、見し雪にかはらねども、我は、鶴氅を著て、立つて徘徊すべき、袂も朽ちて袖せばき、細布衣陸奥の、けふの寒さを如何にせむ。あら、面白からずの雪の日やな。

「あら、れもひも寄らずや、この大雪に、何とて、こゝにたゝずみて、御入り候ふぞ。」「さん候ふ。修行者の、御入り候ふが、一夜の御宿と仰せ候ふほどに、御留守の由、申して候へば、御歸まで、御待ちあらうずる由、仰せ候ふほどに、これまでまゐりて候ふ。」「さては、その修行者は、いづくに、御入り候ふぞ。」「あれに、御入り候ふ。」「われらが事にて候ふ。まだ、日は、高く候へども、あまりの大雪にて、前後を忘じて候ふほどに、一夜の宿を、御貸し候へ。」「易きほどのことにて候へども、餘に、見苦しきほどに、御宿はかなひ候ふまじ。」「いやいや、見苦しきは苦しからぬことにて候ふ。平に、一夜の宿を、御貸し候へ。」とめ申したくは候へども、われら夫婦さへ、住みかねたる體にて候ふほどに、なかなか、御宿は、思ひもよらぬことにて候ふ。これより、十八町ばかりあなたに、山本の里とて、よきとまりの候ふ。日も暮れぬ前に、一足も早く、御出で候へ。」「さては、さか、御貸しあるまじいにて候ふか。」「御いたはしくは存じ候へども、御宿はまゐらせ難う候ふ。」「あら、曲もなや、よしなき人を待ち申して候ふものかな。」

「淺ましや、われら、かやうに衰ふるも、前世の戒行拙き故なり。せめては、かやうの人に、値遇申してこそ、後の世の便ともなるべけれ。然るべくば、御宿をまゐらせたまひ候へ。」左樣に、思し召し候はば、何とて、以前には承り候はぬぞ。いやいや、この大雪に、遠くは、御出で候ふまじ。某、追ひつき、とめ申さうずるにて候ふ。

「なうなう、旅人、御宿參らせうなう。あまりの大雪に、申すこともの聞えぬげに候ふ。御いたはしの御有樣やな。もと、降りし雪に、道を忘れ、今、降る雪に、行方を失ひ、一つ所にたゝずみて、袖なる雪をうち拂ひ、うち拂ひまたまふけしき、古歌の意に似たるぞや。」駒とめて、袖うち拂ふ、かげもなし。佐野のわたりの、雪の夕ぐれ。「かやうに詠みしは、大和路や、三輪が崎なる佐野の渡、これは、東路の、佐野のわたりの雪の暮に、迷ひつかれ給はむより、見苦しく候へども、一夜はとまり給へやげに、これも、旅の宿、かりそめながら、値遇の縁、一樹の蔭の宿も、この世ならぬ契なりけり。それは、雨の樹蔭、これは、霜の軒ふりて、うき寢ながらの草枕、夢より霜や結ぶらむ。（謠曲集）

一五、鎭西八郎爲朝 その一

新院は、齋院の御所より、北殿へ遷らせ給ふ。左府は、車にて、參り給ふ。白河殿より北、河原より東、春日の末にありければ、北殿とぞ申しける。南の大炊御門表に、東西に、門二つあり。東

の門をば、平馬助忠正、承つて、父子五人、竝に、多田藏人大夫頼憲、都合、二百餘騎にて、固めたり。西の門をば、六條判官爲義、承つて、父子六人して、固めたり。その勢、百騎ばかりには過ぎざりけり。これこそ、猛勢なるべきが、嫡子義朝に附いて、多分は、内裏へ參りけり。こゝに、鎭西八郎爲朝は、「われは、親にも連るまじ。兄にも具すまじ。功名、不覺も紛れぬ樣に、只一人、いかにも、强からむ方へ差し向け給へ。たとひ、千騎もあれ、萬騎もあれ、一方は射拂はむずるなり」とぞ、申しける。依つて、西河原表の門をば固めたり。北の春日表の門をば、左衞門大夫家弘、承つて、子供具して、固めたり。その勢、百五十騎とぞ聞えし。

抑も、爲朝一人として、殊更、大事の門を固めたること、武勇、天下に許されし故なり。件の男、器量、人に超え、心、飽くまで、剛にして、大力の强弓、矢つぎ早の手利なり。弓手の肘、馬手に、四寸延びて、矢束をひくこと、世に超えたり。幼少より、不敵にして、兄にも、所を置かず、傍若無人なりしかば、身に添へて、都に置きなば惡しかりなむとて、父、不興して、十三の歳より、鎭西の方へ追ひ下すに、豐後の國に居住し、尾張權守家遠を、めのととし、肥後の國の阿曾平四郎忠景が子、三郎忠國が壻になつて、君よりも賜らぬ、九國の總追捕使と號して、筑紫を從へむとおもければ、菊池、原田を、はじめとして、所々に、城を構へて、立て籠れば、その儀ならば、いで、落して、見せむとて、いまだ、勢も附かざるに、忠國ばかりを、案内者として、十三の歳の三月

の末より、十五の歳の十月まで、大事の軍をすること、二十餘度、城を落すこと、數十箇所なり。城を攻むる謀、敵を伐つ術、人に勝れて、三年が内に、九國を、皆、攻め落して、みづから、總追捕使に押しなつて、惡行多かりけるにや、香椎宮の神人等、都に上り、訴へ申す間、いにし久壽元年十一月二十六日、德大寺中納言公能卿を、上卿として、外記に仰せて、宣旨を下さる。

源爲朝、久住宰府、忽諸朝憲、咸背綸言、梟惡頻聞、狼藉尤甚、早可令禁進其身、依宣旨執達如件。

然れども、爲朝、猶、參洛せざりければ、れなじき二年四月三日、父爲義を解官せられて、前檢非違使になされたり。爲朝、これを聞きて、親の、科に當り給ふらむこそあさましけれ。その儀ならば、われこそ、いかなる罪科にも行はれむずれ」とて、急ぎ上りければ、國人、共に、上洛すべきよし、申しけれども、大勢にて、罷り上らむこと、上聞、穩便ならずとて、形の如くにつき從ふ兵ばかり召し具しけり。傳子の、箭前拂の須藤九郎家季、その兄、隙間數の惡七別當、手取の與次、同じき與三郎、三町礫の紀平次大夫、大矢の新三郎、越矢の源太、松浦二郎、左中次吉田兵衞、打手の紀八、高間三郎、同じく四郎を、はじめとして、二十八騎をぞ具したりける。依つて、去年より在京したりしを、父、不興をゆるして、今度の御大事に召し具しけるなり。

一六、　鎭西八郎爲朝その二

爲朝は、七尺ばかりなる男の、目角、二つ、切れたるが、紺地に、色々の絲を以て、獅子の丸を縫つたる直垂に、八龍といふ鎧を似せて、白き唐綾を以て威したる、大荒目の鎧、れなじき獅子の金物打つたるを著るまゝに、三尺五寸の太刀に、熊の皮の尻鞘入れ、五人張の弓、長さ、七尺五寸にて、鈔打つたるに、三十六差したる、黑羽の矢負ひ、兜をば、郎等に持たせて、歩み出でたる體、樊噲も、かくやと覺えて、ゆゝしかりき。謀は、張良にも劣らざれば、堅き陣を破ること、吳子、孫子が、難しとするところを得、弓は、養由にも恥ぢざれば、天を翔る鳥、地を走る獸、恐れずといふことなし。上皇をはじめまゐらせて、あらゆる人々、音にきこゆる爲朝見むとて、擧り給ふ。左府、すなはち、「合

戰の趣、はからひ申せ」と、宣ひければ、畏つて、「爲朝、久しく、鎭西に、居住仕つて、九國の者ども從へ候ふについて、大小の合戰、數を知らず。中にも、折角の合戰、二十餘箇度なり。或は、敵に圍まれて、强陣を破り、或は、城を攻めて、敵を亡すにも、皆、夜討に如くこと侍らず。然れば、只今、高松殿に押し寄せ、三方に、火を懸け、一方にて、支へ候はむに、火を遁れむものは、矢を免るべからず。矢を恐れむ者は、火を遁るべからず。主上の御方、心にくくも候はず。たゞし、兄にて候ふ義朝などこそ驅け出でむずらめ、それも、眞中指して、射透し候ひなむ。まして、淸盛などがへろへろ矢、何程の事か候ふべき。鎧の袖にて拂ひ、蹴散して、捨てなむ。行幸、他所へ成らば、御ゆるされを蒙つて、御供の

者、少々、射むずる程ならば、定めて、駕輿丁も、御輿を捨てて、逃げ去り候はむずらむ。その時、爲朝參り向ひ、行幸を、この御所へ成し奉り、君を、御位に卽けまゐらせむこと、掌を反す如くに候ふべし。主上を迎へまゐらせむこと、爲朝、矢、二つ三つ、放さむずるばかりにて、いまだ、天の明けざらむ前に、勝負を決せむ條、何の疑か候ふべき」と、憚る所もなく申したりければ、左府「爲朝が申すやう、以ての外の荒儀なり。歳の若きが致す所か。夜討などいふこと、汝等が同士軍、十騎二十騎の私事なり。さすが、主上、上皇の御國あらそひに、源平、數をつくして、兩方に在つて、勝負を決せむに、無下に、然るべからず。その上、南都の衆徒を召さるゝことあり。興福寺の信實、玄實等、芳野、十

津河の、指矢三町、遠矢八町といふ者どもを召し具して、千餘騎にて參るが、今夜は、宇治に著き、富家殿の見參に入り、曉、これへ參るべし。彼等を待ちとゝのへて、合戰をば致すべし。又、明日、院司の公卿、殿上人を催さむに、參らざる者共をば、死罪に行ふべし。首を刎ぬることと、兩三人に及ばば、殘は、などか參らざるべき」と、仰せられければ、爲朝、上には、承伏申して、御前を退り立ちて、つぶやきけるは、「和漢の先蹤、朝廷の禮節には、似も似ぬ事なれば、合戰の道をば、武士にこそ任せらるべきに、道にもあらぬ御はからひ、いかがあらむ。義朝は、武略の奥義を究めたる者なれば、定めて、今夜、寄せむとぞ仕り候ふらむ。明日までも延べばこそ、芳野法師も、奈良大衆も入るべけ

れ、たゞ今、押し寄せて、風上に、火を懸けたらむには、戰ふとも、いかでか、利あらむ。敵、勝に乘る程ならば、たれか一人、安穩なるべき。口惜しきことかな」とぞ、申しける。（保元物語）

一七、戰爭と文學

一國の文學は、他の藝術とひとしく、その國民の思想、れよび、感情を代表するもの、すなはち、國民の靜相的活動の代表なり。さかして、戰爭は、れなじ國民の動相的活動なり。さて、この、象を殊にして、根を、一にせる二者の關係は、說明しやすきが如くにして、說明しやすからず。簡單なるが如くにして、複雜なり。

文學と戰爭との關係は、二樣なり。文學の、主となれる場合と、文學の、客となれる場合となり。換言すれば、文學が、戰亂の因緣となれる場合と、文學が、戰亂の果報となれる場合となり。もとより、文學も、戰亂も、ともに、當代の思想、感情の反映なれば、互に、動機を一にし、相因果すべきものなれども、なほ、こまかに、わかつ時は、主客因果の差異あり。たとへば、佛國革命にさきだちて、ルソー、ボルテール等が唱道せし、社會革新的の學說のごとき、たとひ、その因たるに足らざりしとせむも、その一緣たりしや、明なり。また、わが國にていへば、かの水戸藩等の各勤王家の述作の如き、いづれも、明治革新の間接緣となりしなり。これらは、文學の、主となれる場合なり。たゞし、

嚴正にいへば、かくの如きは、畢竟、天下の大勢の、然らしめしところ、文學は、わづかに、大勢爆發の一導火たりしに、外ならざるなり。一二、文學の力、よく、天下の大勢を動し得べしと思はむは、まことに、白日夢の譫語なり。

戰爭の、文學にれよぼす影響は、前者に比すれば、利害、やゝ、複雜なり。抑も、戰爭は、その因緣、影響の上よりいへば、いかなる場合にも、前後數代に關係すれど、その實際の作用上よりいへば、專ら、當代にのみ關係するものなり。そは、全國の人心をして、奮發激昂せしむるなど、その當代の得喪に聯關するところ、甚だ、深ければなり。しかるに、文學の活動する範圍は、かくの如くならず、現世間に關係すると共に、未來幾千年後の世間にも關係すべき特質を具ふ。これ、文學の價値の、現世兼未來に、普遍平等なる所以なり。しかして、もとより、現世に聯關するものなるが故に、間接、もしくは、直接に、當代の大事件によりて、動さるゝことなき能はず。ましてや、國家的鬪爭の如き大現象は、必ず、若干の大影響を、文學の主題、れよび、性質の上にれよぼすべき理なり。しからば、その影響は、善か、はた、惡か。

この影響も、また、直接と間接との二あり。さて、いかなる場合にも、その直接の影響は、文學の爲には、悅ぶべきものにあらず。抑も、文學は、もと、一種の遊戲なれど、戰爭は、最も、嚴格なる實際事業なり。されば、戰爭は、人心をして、最も、現在に傾か

しむるものなれば、利己的、即ち、差別的たり。かの、優美なる遊戯三昧は、人心をして、一種の別天地に逍遙せしめむと期するものなれば、最も、無私的、即ち、平等的なり。その枘鑿、相容れざる性、一朝、混ぜられて、一となる。文、もし、武に勝たば、文弱、武もし、文に勝たば、殺伐、よし、まからざらむも、文學を擧げて、現世的たらしめむは、必然なり。國家の大鬪爭にれける激昂は、國民をして、その全生命をも、犧牲に供せしむ。況や、その他をや。啻に、文學美術のみならむや、教育、農商業等、片時も缺くべからざるものすら、或は、時に、等閑視せらるゝことあり。

戰爭の當時は、概して、詩靈かくれ、天馬蟄する時なり。文學の、最も、高尚なるもの、即ち、純乎たる客觀の詩、劇詩、小說のたぐひは、まばらく、これが爲に、影をかくさむ。ひとり、主觀の詩、即ち、抒情述懷の作は、或は、實感に動かされたる、多感なる詩人が、不思議靈妙なる繡腸より、なり出でて、至誠、鬼神をして、哭せしむることなきにしもあらじ。されど、そは、偶然なる結果にして、れそらくは、戰爭の與ふる、必然なる直接影響にはあらざるべし。

更に、いはむ。戰爭は、普遍平等なるべき文學をして、特殊差別の文學たらしめ、現當二世の功德を沒して、世間一時の好尚に供す。こゝにれいてや、この時代に、最も、歡迎せらるべき文學は、現世的實錄、もしくは、現世的事件に緣故ある記錄、これなり。すなはち、文學の形式上よりいへば、所謂、寫實的なる

もの、最も、喜ばれ、質の上よりいへば、勇壯悲哀、もしくは、殺伐なるもの、また、精神の上よりいへば、總じて、主觀的、抒情的、就中、愛國の思想感情を吐露せるもの、最も、悅ばれむ。たとへば、その國の、過去の光榮の記錄、もしくは、過去の英雄、豪傑、忠臣、孝子、節婦、烈女等の傳說の如きは、同一精神に協ふべきものなれば、これら、史に關する抒情歌、敍事詩、小說等、一層の繁昌をなすことあるべし。これ、余の、揣摩の說にあらず、列國の文學史、皆、これを證して、あまりあらむ（坪內雄藏著文學その折々）

一八、讀書の選擇

エマソンいはく、「書を讀まば、最も、適當なるもののみを讀

むべし。さらぬ群書の涉獵に、記憶力を徒費することなかれ」と。かの新聞雜誌と、拙劣なる小說とのみを愛讀するものは、エマソンの、いはゆる劣等なる群書に、記憶力を徒費するものなり。否、彼等にして、かゝる劣等なる讀書の間に、歲月を涉りて、毫も、良好なる讀書に、趣味を覓むることを勉めずんば、そは、啻に、時間と記憶力との徒費のみにあらじ。かゝる讀書は、注意力を、薄弱ならしめ、思想の淸新を絕ち、氣象の煥發を妨げ、神餒ゑ、氣阻みて、人をして、頹然として、生氣なきに至らしむべし。

これを覺醒する、まさに、いかにすべき。エマソン、また、敎へて、いはく、「讀書の最良法は、かの時間と紙とによりて、製作せ

られたるものを措いて、直に、天然を讀むにあり」と。然り。誠に、汝の趣味の睡眠を自覺せば、暫く、その新聞雜誌と小說とを棄てて、名山大川の間に、直に、秀麗なる、天然の文學に接せよ。親しく、偉大なる、審美の靈光に浴せよ。庶幾くは、汝が趣味を覺醒せしむることを得むか。

偉大なる文學は、偉大なる天然に近し。天然の爲すところは、天才の筆、亦、よく、これを爲すことを得べし。名篇大作に親炙するは、恰も、名山大川の間に逍遙するに似たり。されば、善良なる讀書は、よく、眠れる趣味識を警醒し、よく、これを啓發し、助長し、清新なる思想、斬新なる筆力を涵養するものなりとせば、予は、目下の讀書界を警醒し、指導すべき、唯一の急務

は、これに、讀書の選擇を敎ふるにありと信ぜむとす。

蓋し、苟も、書を讀まむとせば、成るべく、優等なるものを選ぶべきこと、勿論なり。されども、最も、優等なる書、卽ち、第一流の書は、天下、そもそも、幾何かある。今、單に、日本の文學書についていはば、萬葉の一部と、源語と、近松の作と、その他、なほ、强ひて、二三を數ふるを得とも、一國の文學界の讀書を、この僅少なる書册に限らむことは、殆ど、なし得べきにあらじ。そは、また、實に、予等が、偏狹固陋として、忌むところなり。

今、この偏狹と固陋とを脫して、よく、優等なる書に、專なることを得むとせば、則ち、當に、いかにかすべき。かのエマソンは、實行し得べき方法なりと稱して、左の三則を示しぬ。

まづ、いはく、「一年を經ざる著作は讀むことなかれ」と。蓋し、一年を經て、なほ、社會に忘られざるものは、或は、多少の趣味あるものならむ。一年をだに經ずして、反故として、投棄せらるゝものは、恐くは、一讀の價値なきものならむ。歳月の淘汰を待たずして、徒に、爭うて、新版物を讀まむは、徒勞と時間とを賭して、文學通の虚名を博し得る所以のみ。

又、いはく、「有名ならぬものは讀むことなかれ」と。こは、徒に、所謂、珍本に蟻集することなからむことを敎ふるなり。そもそも、名聲とは、多數の識者の鑑賞の結果にあらずや。その多數の鑑賞に反對して、ある機會のために、纔に、散佚を免れし古書を、ことさらに、熟讀せむは、殆ど、これ、痴に類せずや。さる、

疑しき勞力を、敢てせむよりは、まづ、有名なるものを讀み盡せ。予等の眼前には、半生を、讀書に費すとも、なほ、熟讀玩味する能はざるべき、許多の、有名なる著作あるにあらずや。

又、いはく、「嗜好に適せざるものは讀むことなかれ」と。極めて、野卑なる嗜好の、人を誤ることは、いづれの方面にれいても、吾等の知るところなれども、前述の二條件に適合したる範圍にれいて、その嗜好するところを求めば、蓋し、大過なきを得むか。ヒルは、更に、この條件を敷演して、いはく、「再度以上、讀破することを欲せざる書は讀むことなかれ」と。試に思へ、現時の讀書界が、よく、再讀玩味したる新刷、そも、いくばくかある。讀者は、選擇を忘れ、作者は、推敲を忘れ、相率ゐて、沒趣味

の裡に投ぜむとす。嘆ぜざらむと欲すとも得べけむや。

故に、われもへらく、以上の三則は、讀書界の時弊を救ふべき最好手段なりと。（佐々政一著鶉衣評釋に據る）

一九、元祿時代の文學

太平、年ひさしく、四民、慘憺たりし、父祖の世を、既に、忘れて、食に飽き、衣を暖にし、安穩なる生活を送れば、更に、新なる文藝の行はれむことを望むや、切なり。この需要に應じて、種々の文學、盛に興り、こゝに、いはゆる、元祿時代の盛運は成れるなり。

將軍綱吉、漢學を好み、志ばゝ、儒者を集めて、經義を討論

せしめ、また、みづから、經書を講ず。上の好むところ、下、これになびくならひ、諸侯も、爭うて、儒者を聘す。こゝに於いて、漢學、頗る熾に、學者、一時に、輩出す。林家には、朱學を宗として、羅山の孫鳳岡、幕府に信仰せらる。木下順庵の學は、博通不偏を主とし、はじめ、京師に、帷を下し、後、江戸に出づ。門下に、博學奇才の士多く、雨森芳洲、新井白石、室鳩巣、祇園南海等、ことに、名あり。伊藤仁齋、京に起りて、朱學は、孔孟の古意にあらずとして、これを斥け、別に、古學を立つ。その子東涯、博覽にして、よく、父の學を祖述す。荻生徂徠、江戸にあり。また、朱學を駁し、六經を重んじて、古文辭學を立て、仁齋父子と對峙す。その門人に、太宰春臺は、道義に通じ、服部南郭は、詩文をよくす。

水戸侯德川光圀の、最も、和漢の文學に、功あることは、世の、あまねく、知るところなれば、いはず。その學の、重んずるところは、專ら、國體を明し、名分を正すにあり。後世、勤王攘夷の說の勃興せしも、水戸家の學問、與つて、大に、力あるべし。

國文學の面目を一新せしことは、漢文學にも超えたり。北村季吟、京にありて、松永貞德に學ぶ。源氏物語湖月抄、枕草紙春曙抄等、著すところの、古文の註釋、太だ多し。いづれも、懇切を、旨として、世人に、益ありといへども、從來の學風を保守して、その外に出でず。のち、幕府の聘に應じて、江戸に下り、歌學所となる。子孫代々、その職を繼ぐ。季吟の舊派に對して、新派の旗を翻しし者、江戸に、戸田茂睡あり。大阪に、下河邊長流、釋

契沖あり。茂睡は、梨本集を著して、和歌の積弊を論ぜし功あるのみ。長流の、國文和歌を講ずるや、中古以來の僻說を捨て、先人未發の說を述ぶ。光圀の依託によりて、萬葉集の註釋を企てしが、性、怠慢にして、業を卒へずして歿す。契沖は、眞言宗の僧にして、長流と親し。佛經を學ぶ傍、國文を好み、造詣、きはめて深く、識見、世に絕す。その著書少からざるが中に、學界に、大影響をあたへしは、萬葉代匠記と、和字正濫抄となり。代匠記は、長流歿してのち、光圀の囑に應じて、作りしもの、平安朝以來、濃霧の中に隱れたりし奈良朝文學は、こゝに、はじめて、明瞭なるに至れり。和字正濫抄は、中古以來、假名遣の誤れるを正せるものなり。かくて、契沖は、實に、近世の國文學を開

きしものといふべし。

やゝ下りて、享保の頃、京の稻荷神社の祠官に、荷田春滿あり。深く、國史律令に通じ、從來の、わが國書を說くものの、佛敎、或は、儒道の意を附會せるを、非とし、本來の古意を闡明するを以て、己が任とす。いはゆる、國學とて、皇國の道義を說くは、この人に起れるなり。

學問の方面にれける文學の發達は、れよそ、かくの如くなるが、純文學の進步は、更に、驚くべし。俳諧には、寬文の頃、西山宗因、大阪に居り、古風よりいでて、漢語を用ゐ、字あまりを好み、佶倔なる調をなす。三都とともに、門人多く、一時、天下に鳴る。この流を、談林風と稱す。松尾桃青は、伊賀の人、京に出でて、俳

諧を、北村季吟に學び、後、江戸に出で、また、東西に周遊して、吟腸を養ひ、遂に、正風をれこす。その風、幽玄蘊藉にして、天地の秘を發くにあり。四方、皆、これに靡き、門人に、俊秀の士多し。榎本其角は、江戸にありて、江戸座を興し、服部嵐雪も、江戸に住みて、雪中庵と稱す。森川許六は、彥根に、向井去來は、京に居り、東花坊支考は、美濃風、岩田涼菟は、伊勢風を開く。かくて、俳諧は、都鄙上下に、遍く、行はるゝに至れり。

小說も、貞享、元祿の頃、井原西鶴の出でしより、假名草紙の、幼稚なりしを轉じて、こまかに、風俗を寫し、人情を穿つに至る。これを、浮世草紙と稱す。西鶴は、大阪の人、宗因に學んで、俳諧を善くせしが、その才は、これに滿足せず、進んで、筆を、小說

に染むその筆、輕妙にして、法格にかゝはらず。寫すところ、多くは、短篇なり。

小說に伴ひて、戲曲も、長足の進歩をなす。これよりさき、既に、淨瑠璃は行はれしが、なほ、拙劣なるものなりき。元祿の頃、近松門左衞門ありぱじめ、京にありしが、大阪に下りて、淨瑠璃大夫竹本義大夫のために、戲曲を作る。才藻、涌くが如く、筆路の、自在なること、行雲流水に似たり。

この時代には、文學上、京阪のかた、江戸より、重きをなし、殊に、戲曲小說にては、大阪が、その燒點たりしことを忘るべからず。この地や、西國往來の要津にして、商業の、最も、繁昌せる處、豐臣秀吉が、こゝに、城廓を築きしより、この時代に至りて、

ますます、盛になり、遂に、種々の文學をも生じたるなり。また、當時の風俗、遊蕩奢侈に流れ、人情、浮華淫靡に趨りたれば、文學も、れのづから、輕佻卑俗の調を帶びたること、その頃の戲曲小說を繙かば、一見して、知らるべし。（藤岡作太郎）

二〇、蟲の聲

○　上島鬼貫

行水の、すてどころなし、虫のこゑ。

○　杉山杉風

かつくりと、拔けそむる齒や、秋の風。

○　松尾桃青

三井寺の門たゝかばや、けふの月。　榎本其角

○

名月や、たゝみのうへの松のかげ。　松尾桃青

○

菊の香や、奈良にはふるき、佛たち。　山本荷兮

○

木枯に、ふつ日の月の、吹き散るか。　久村曉臺

○

あかつきや、鯨の吼ゆる、志もの海。　高桑闌更

○

枯蘆の、日に日に折れて、流れけり。

○

易水に、根ぶかながるゝ、寒さかな。　谷口蕪村

○

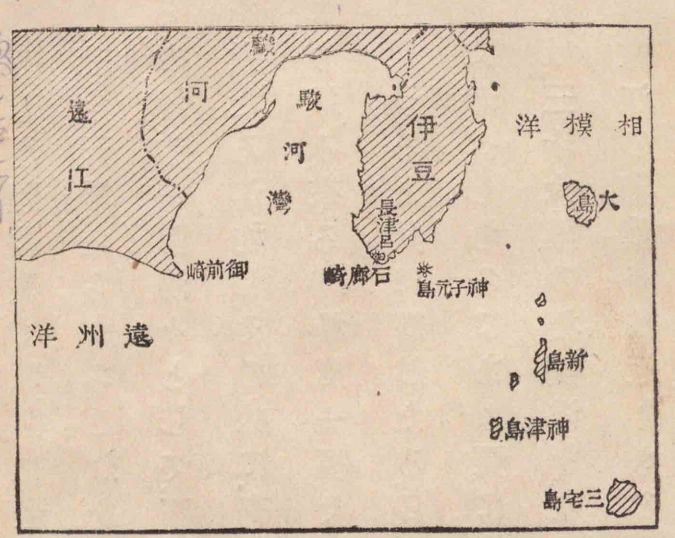
應々と、いへどたゝくや、雪のかど。　向井去來

二一、石廊崎

長津呂の村を過ぎ、左折して、山に登ること、半里ばかり、燈臺あり。望樓あり。こゝ、石廊崎なり。豆州の最南端にして、石聚りて、山を成し、突兀として、海表を拔くこと數百仞、その下は、削りて、竪つるが如し。山路、斷ゆるところに、梯あり。これを踏みて、降り盡せば、祠あり。巖石の穹窿、自然の洞穴をなせると

ころに、巧に、木を架して、構へたるものにて、規模は、小にして、十の一に及ばざらむも、耶馬溪頭の羅漢寺に比して、奇工、決して、劣れりとは見えず。祀られしは、ところがら、海神にして、靈驗、すぐれて、あらたかなればにや、末世の今も、香火、なほ、盛なり。文武の御代、役の小角、この國の大嶋に流されし時、創建せしよし傳ふれど、神名帳などに見えねば、たしかなる筋は知らず。今は、たゞ、石廊の權現と呼びならへり。

祠前に、梯を設け、また、壁に傍うて上る。その、窮るところにいたれば、直に、海に臨むべし。この間、數十歩、歩々、足を承くるところ、僅に數尺、やがて、巖嘴突出するところにいたれば、嵐の後の大わたつみの鳴り轟く音、いとも、すさまじく、軟脚、ふ



るふばかりなり。巖頭に立てる小祠は、暴風のために、屋根を剝がれしにや、僅に、四柱を殘せるのみ。匍匐上下して、みな、拜謁し、やがて、戰兢の念をれさへ、長立して、潭底を見る。濤聲、斷崖に鎚して、鼉鼓の噪ぐかと怪まれ、怒潮の、巖根を呑むもの、その勢、奔馬の如く、席を捲くが如く、一擊して退き、頹れて、回る時、水犀、三千の弩に射られしも、かくや。萬顆の飛泡は、長空に滿ちて、燕山の雪

を舞はするが如く、崑岡の玉を碎くがごとく、四面の崖より卻きし潮頭は、盡く、潭間に聚りて、星馳電激の勢を爲し、煙霧を吐き、天風、たちまち、これを鼓盪す。かくて、漸く、靜らむとするや、潭中一面、沸々として、石灰に、水を注ぎたるが如く、又、乳を煮たるが如し。その、殊に、奇絶なるは、潮陣、低高に隨ひ、洋心より進み來る時、横風一颯、その頭を拂ひ、一片の水氣、空中に飛散すると共に、輝然たる日光に照映して、無數の小虹を、海面に浮べしむるにあり。更に、皆を決して、水天の際を曠望すれば、三十六里の相模洋を、左にし、七十二里の遠州洋を、右にし、遠江の御前崎は、近きものから、煙靄、あつく、立ちこめたれば、それか、あらぬか、知るべからず。南は、大瀛淼漫、天と、かぎり

なく、大嶋、新嶋、神津、三宅の諸嶋、翠然たる青螺を、波濤の間に羅列し、最も、近きところは、一里を隔てて、神子元嶋の燈臺、突兀として、洋中に聳立す。望眼きはまらず、飄然として、天風にうそぶけば、いまだ、玉液を服せざるに、骨は、はやく、仙せしに似たり。

奇、すでに、盡きぬ。乃ち、ひそかに、心にれもへらく、もし、この日をして、風日晴朗ならしめば、手石の洞、かならず、探勝の興を得たりしならむ。然れども、こゝ、岬頭に逢著せる、風水撞合の壯觀は、遂に、缺けぬべし。あゝ、熊魚、二つながら得がたし。われは、むしろ、手石の洞を棄てしを惜まずも。遲留、すでに、時を經、靈境、ひさしく、とゞまるべからず。古人、危に臨む戒を思ひ

出づるに及びては、つきせぬ名殘を惜みつゝ、遂に、立ち去りぬ。（久保得二）

二二、友人の洋行を送る

去月十五日、横濱を解纜せる日本郵船常陸丸は、わが友某を載せて、西航の途に上りぬ。この文の、世に出でぬべき頃には、君は、紅海の岸に、砂漠の月を眺むらむか。スエズの渚に、故國のあとを偲ぶらむか。

心あるものにとりて、旅行ばかり、大なる教訓を齎すはなし。そは、自然の興會、人生の趣味、歴史の回顧、すべて、旅行によりて、活ける知識となり得べければなり。されば、にや、古より、

大なる詩人の生涯の、少からぬ部分は、旅行の中に費されたりき。ゲーテは、伊太利の漫遊より歸りて、みづから、その詩想の、頓に、進めるを驚けりとさへ傳へらるゝにあらずや。われは、品性あり、學殖あり、詩情ある君が、能く、這般の消息を解し得る期、遠きにあらざるべきを疑はず。

君は、詩人なり。詩人として、生死すべき人なり。往年、君の、仙臺に赴きし時、われは、英語の教師にはつべき君ならぬを信じたりき。今や、君、職を辭し、みづから、資を抛ちて、遠く、歐洲に遊ぶ。發するに臨み、その近作を輯めて、「曉鐘」の一篇を、公にし、その首に、ゲーテの句を題して、いはく、「われをして、歌ふ能はざらしめむか、これ、われに、命なきに倖しきなり」と。これある

かな、君。壯なるかな、君。歌へ、大に歌へ。理想を歌ひ、人道を愛し、進歩を信じ、無窮に進む、これ、詩人たる君が天職なり。想ふに、サンタクロースの煙波、とこしなへに、依稀して、ワイマルの故國、舊によりて、綠ならむ。古哲を志のぶ、君の情や、いかに。サンベルナル峰、高きところ、トランスチベルの水深きほとり、古今の感慨、君が俯仰に任せむ。行けや、君。（高山林次郎著樗牛全集）

二三、人生の四季

語の、創新なるをめづるは、人情の自然なれども、語は、新しきをのみ、取るべきにあらず。古くより、いひふるしたる語の、今、なほ、棄てがたき、まゝあり。かゝる語は、分外に、幽玄の旨を含めることあり。更に、敷衍せらるべきことあり。新しき解釋を容るゝことあり。語の、創新ならざるを惡むは、自然の風物の、萬古一色なるを惡まむが如し。いかなる新釋を容るとも、餘あらむ語は、實に、不易の妙語なり。その幽玄なるは、自然その物にも比すべし。志かして、かゝるたぐひは、ひとり、賢者、詩人の語にのみいて、見るのみにあらず、俚歌、及び、俗言のうちにも、志ばしばあり。かの、人生を、四季に配して、少壯を、春季とし、老衰を、晩秋、又は、冬季とするが如き、その一例なり。

この、陳腐なる對比は、何人も思ひつくべき、平凡なる喩なれど、その、新奇ならぬ所、やがて、その、妥當なる所以なるが如し。されもふに、人の一生を、物に喩へたるは、東西の詩文章に、い

と、古くより、あまた、見えたれど、かばかり、妥當にして、旨味の深きはあらじ。ジョンソンが、これを、航海に比し、シェクスピアが、これを、演劇に較べたるなどは、人の知るところにて、かゝるたぐひの著想は、こなたにも見えたれど、これらは、むしろ、頓才の落想たるに近く、その寓意も、また、皮相ばかりにして、淺々し。四季に比べたるものこそ、いよいよ、玩味して、その旨、いよいよ、深しといふべけれ。

蓋し、人生と四季と相似たるは、詩人の想像をまたずして、いちぢるし。紅顔の、花に似たるを見、白髮の、雪に似たるを見むもの、誰か、春冬を聯想せざらむ。うら若きを、人生の朝と名づけ、老い朽ちたるを、人生の夕と呼べるにひとしく、翁をさして、幾十冬の霜を戴くといひ、少女の麗しきを稱して、二八の春の花といはむは、自然に、思ひよるべき喩なり。かゝるたぐひ、一々に、擧げていはば、數かぎりもなけれど、これらは、皆、一かどほどの對比にて、普く、四季に配したるにはあらず。さるにても、この比喩は、かくばかり、妙にして、妥當なるに、想像のいみじき詩人の、などて、今一層、敷衍せざりしと、心得がたく思ひ、年ごろ、聊か、心して、東西の詩文を讀みしに、英國の作家のうちには、四季に、人生を思ひ寄せたるもの、少からず。トムソン、ソウシーが作に見えたる觀念の如きは、まことに、玄妙なり。ソウシー、秋を詠じて、

人は、秋季の美しきを、ひたすらに、哀しきものに思ひなし

て、年老い、精神衰へ、苦痛、身にあまりながら、なほ、死にやらぬ老人の、いと、淺ましげなるに思ひ寄すれど、我が眼には、忘か、見えず。秋の、長閑にして、物靜なるは、たとへば、肉體は、衰へたれど、精神は、なほ、健なる人の、後世の信心堅固にして、老いて、いよゝ、心の花の開けたらむがごとし。人は、秋の景物を、黯憺落莫なるものとなし、この、うつくしの世の中に、あるれそろしき元機活動し、生物のすみかなる、氣、土、水の三界は、互に、相呑噬して、止む時なく、又、人間には、惡害と不幸と纏綿して、絶えて、行末の頼まれぬ、いと、淺ましきものなりと思ふ。あはれ、世の人の信念も、わが思ひなせる如くあらばや。あはれ、死は、常に、生を産み、惡は、常に、みづから、

亡び行くことを知らせばや。あはれ、この、れそろしき嵐のかなたに、麗しき、天つ日の、ほのぼのと、さしのぼる影を見せばや。忘からば、何物か、喜の種ならぬ。世の憂き事は、悉く、忘れらるべし。たれかは、常に、神明の威德の、いと、偉なるを認めざらむ。

と、歌へり。また、冬を詠じて、

春の、長閑に、和げる、夏の夕暮の風の涼しき、秋の風の、錦なす森にわたる、いづれ、美しからぬはなけれど、寂寞にして、靜なる、冬の景色の、さながら、造化の禪定したらむやうなるこそ、平靜なる心には樂しけれ。

と、歌ひ、なほ、くさぐさの景物を描ける後、

いでや、造化が、冬といふ墓穴のうちに潛み匿れて、生ひ出づべき芽をもいださず、花一つだに咲かせぬ程ぞ、つらつら、考ふれば樂しかりける。かく、ものばし、かくろへるは、やがて、また、來む春を待ちて、こよなく、麗しう、裝はせたる芽をもひらき、花をも咲かせむ爲と思へば。

と、歌へり。かうやうの想、和漢のには、いと、稀なり。

ことに、わが國の詩文人の、四季に對する感想は、れしなべて、かたよりたり。彼等、昔は、春秋の優劣を、風流心に分けかねけむを、いつしか、秋の色を、ひとへに、悲しとのみ見とりて、秋の七草の、優に、やさしき、紅葉の錦の、はでやかなるをも、大かたは、哀を誘ふ媒とのみ詠めて、秋の心を、字のまゝに、愁と釋きつ。この故に、彼等の、四季を歌ふや、前半は、常に、樂しけれど、後半は、常に、悲愴なり。これ、一つには、和漢の詩歌の、とかくに、事物の客觀に泥みて、相を詠ずるを、主とせるにより、また、二つには、中ごろ、佛教の渡り來て、無常變轉のことわりを教へ、秋冬の景物をもて、その無常觀の好比喩となせるに由るならめど、その觀の、とかくに、悲哀に偏したるは、事實なり。げにや、秋の相は、蕭殺慘憺たる者なれど、その、洽く、萬物をして、豐熟せしむる精神は、頗る、樂觀を喚び起すべきにあらずや。秋の風の、淅瀝として、蕭颯たる、恐くは、人をして、悚然たらしむ。されども、その、所謂、小春日和の、脫々として、舒緩なる、などか、わが、歌人の快感を惹かざりけむ。

和漢の詩人の、冬に對する感想は、更に、悲哀なり。されど、その「絶無卽發菩提心」たる理を觀じ來らば、冬の落莫は、やがて、無言の師にあらずや。この故に、バルンスは、特に、冬季にれいて、一種の悅樂を感じ、すなはち、その故を辨へて、曰く、

余が、冬を愛するは、多年の數奇不幸のために、わが心の、悒鬱に傾けるに由るならめど、ま、かも、その、落莫たる頽廢と、凛烈なる風雪とは、暗に、余が心を高めて、偉大崇高なるものに、同感するに、便ならしむ。覆載の間、いまだ、陰雲、空を掩ふ冬の日に、寒林の蔭に逍遙し、北風の、怒つて、樹間に吼え、野にわたりて、怒號するを聞くばかり、心地よきことなし。冬は、余が、無上の歸依節なり。余が心は、恍惚として、ひとへに、彼を渴仰せむとす。古詩人の言によれば、彼は、「風翼に駕して行く」とかや。余は、實に、冬にれいて、彼に、熱誠を感ぜむとするなり。

と。いたづらに、悲哀を感ぜずして、畏敬を感じ、絶望せずして、歸依渴仰す。これ、我が詩文中に、殆ど、かつて、見ざるところなり。（坪內雄藏著文學その折々）

二四、浮世のさが　二篇

一、人のなきあと

人の亡きあとばかり、悲しきはなし。中陰のほど、山里などにうつろひて、便惡しく、せばきところに、あまた、あひ居て、後

の業ども、營みあへる、心、あわたゞし。日數の、早く、過ぐるほどぞ、物にも似ぬ。はての日は、いと、なさけなう、互に、いふ事もなく、われかしこげに、物ひきたゝめ、ちりぢりに、行きあかれぬ。もとのすみかに歸りてぞ、更に、悲しきことは多かるべき。

「去かぞかのことは、あなかしこ、あとの爲、忌むなることぞ」などいへるこそ、かばかりのなかに、何かはと、人の心は、なほうたてわぼゆれ。年月經ても、つゆ、忘るゝにはあらねど、「去るものは、日々に疎し」と、いへることとなれば、さはいへど、その際ばかりは覺えぬにや、よしなし言いひて、うちも笑ひぬ。からは、けうとき山の中にをさめて、さるべき日ばかり、まうでつゝ見れば、程なく、卒都婆も、苔蒸し、木の葉、ふり埋みて、夕の嵐、夜の月のみぞ、言とふよすがなりける。思ひ出でて、去のぶ人あらむ程こそあらめ、そも、また、ほどなく、失せて、聞き傳ふるばかりの末々は、哀とやは思ふ。さるは、あとと、ふ業も絶えぬれば、いづれの人と、名をだに知らず。年々の春の草のみぞ、心あらむ人は、あはれと見るべきを、はては、嵐に咽びし松も、千年を待たで、薪に摧かれ、古き墳は、鋤かれて、田となりぬ。そのかただに、なくなりぬるぞ悲しき。（徒然草）

二、常ならぬ世

飛鳥川の淵瀬、常ならぬ世にしあれば、時移り、事去り、たのしび、かなしび、ゆきかひて、花やかなりしあたりも、人住まぬ野らとなり、變らぬすみかは、人あらたまりぬ。桃李、物言はね

ば、誰と共にか、昔を語らむ。まして、見ぬ古の、やむごとなかりけむあとのみぞ、いとはかなき。京極殿、法成寺など見るこそ、志、とゞまり、事、變じにけるさまは、あはれなれ。御堂殿の造り磨かせ給ひて、庄園、れほく、寄せられ、わが『御ぞうのみ、御門の御うしろみ、世のかためにて、行末までとれぼし置きし時、いかならむ世にも、かばかり、あせ果てむとはれぼしてむや。大門、金堂など、近くまでありしかど、正和の頃、南門は燒けぬ。金堂は、その後、倒れ伏したるまゝにて、取り建つるわざもなし。無量壽院ばかりぞ、そのかたとて、のこりたる。丈六の佛、九體、いと、尊くて、竝びれはします。行成大納言の額、兼行が書ける扉、あざやかに、見ゆるぞ、あはれなる。法華堂なども、いまだ、侍るめり。これも、また、何時までかあらむ。かばかりの名殘だに無きところどころは、れのづから、礎ばかり殘るもあれど、さだかに、知れる人もなし。（徒然草）

二五、寂光院

去ぬる七月九日の日の大地震に、築地もくづれ、荒れたる御所も傾き破れて、いとゞ、住ませ給ふべき御たよりもなく、綠衣の監使、宮門を守るだになし。心のまゝに荒れたる籬は、繁き野邊よりもつゆけく、をり去り顏に、いつしか、蟲の聲々、怨むるも、あはれなり。さるまゝには、夜も、やうやう、長くなれば、いとゞ、御寢覺がちにて、あかしかねさせ給ひけり。つきせ

ぬ御物思に、秋の哀さへうちそひて、いとゞ、忍びがたくぞ思し召されける。何事も、みな、變り果てぬる浮世なれば、れのづから、情をかけ奉るべき、昔の草のゆかりも、皆、枯れはてて、誰、はぐくみ奉るべしとも覺えず。されども、冷泉の大納言隆房の卿の北の方、七條の修理の大夫信隆の卿の北の方より、忍びつゝ、常は、言問ひ申されけり。女院、そのむかし、あの人どものはぐくみにてあるべしと、つゆも、思し召し寄らざりしものをとて、御涙を流させ給ひければ、附きまゐらせたる女房達も、皆、袖をぞ濡されける。

この御住居も、猶、都近くて、玉桙の道ゆき人の、人目も恥ければ、露の御命の、風を待たむほど、憂きこと聞かぬ山の奥へも入りなばやと思し召されけれども、さるべきたよりもましまさず。ある女房の、吉田にまゐりて、申しけるは、「これより北、小原山の奥、寂光院と申すところこそ、靜に候へ」とぞ、申しける。女院、「山里は、物の寂しきことこそあんなれども、世の憂きよりは住みよかなるものを」とて、思し召し立たせ給ひけり。御輿などをば、信隆、隆房の卿の北の方より、御沙汰ありけりとかや。

文治元年九月の末に、かの寂光院へ入らせれはします。道すがらも、四方の梢の、色々なるを、御覽じ過ぎさせ給ふほどに、山陰なればにや、日も、やうやう、暮れかゝりぬ。野寺の鐘の入相の聲すごく、分くる草葉の露ぞ、げみ、いとゞ、御袖濡れま

さり、嵐はげしく、木の葉みだりがはし。空搔きくもり、いつしか、うちまぐれつゝ、鹿の音、かすかに、音づれて、蟲の怨も、たえだえなり。とにかくに、とりあつめたる心ぼそさ、喩へやるべき方もなし。浦づたひ、嶋づたひせしかども、さすが、かくはなかりしものをと思し召すこそ悲しけれ。岩に、苔蒸して、さびたるところなれば、住まゝほしくぞ思し召す。露むすぶ、庭の萩原、霜枯れて、籬の菊の、かれがれに、うつろふ色を、御覽じても、御身の上とやれぼされけむ、佛の御前にまゐらせ給ひて、「天子聖靈、成等正覺、一門亡魂、頓證菩提」と、祈り申させ給ひけり。あはれ、先帝の御面影、ひしと、御身に添ひて、いかならむ世にも忘るべしとも思し召さず。

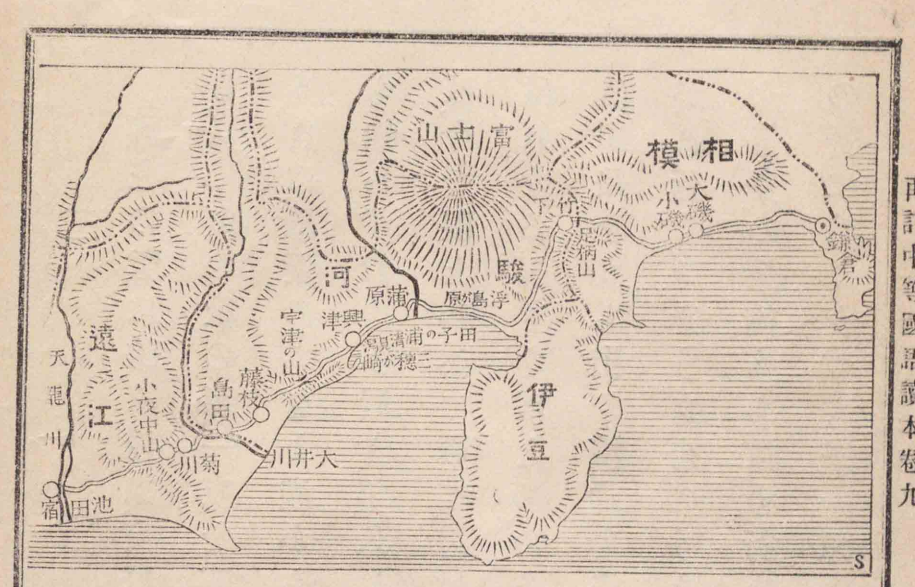
さて、寂光院の傍に、方丈なる御庵室を結びて、一間をば、佛所に定め、一間をば、御寢所にまつらひ、晝夜、朝夕の御勤、常事不斷の御念佛、怠る事なくして、月日を送らせ給ひけり。かくて、神無月の中の五日の暮方に、庭に散りまく楢の葉を、ものの踏みならして、聞えければ、女院、「世を厭ふところに、何者の訪ひくるやらむ。あれ見よや、まのぶべきものならば、いそぎまのばむ」とて、見せらるゝに、小鹿の通るにぞありける。女院、「さて、いかにや、いかにや」と、仰せければ、大納言の佐の局、涙をれさへて、

岩根ふみ、誰かはとはむ。楢の葉の、
そよぐは鹿の、わたるなりけり。

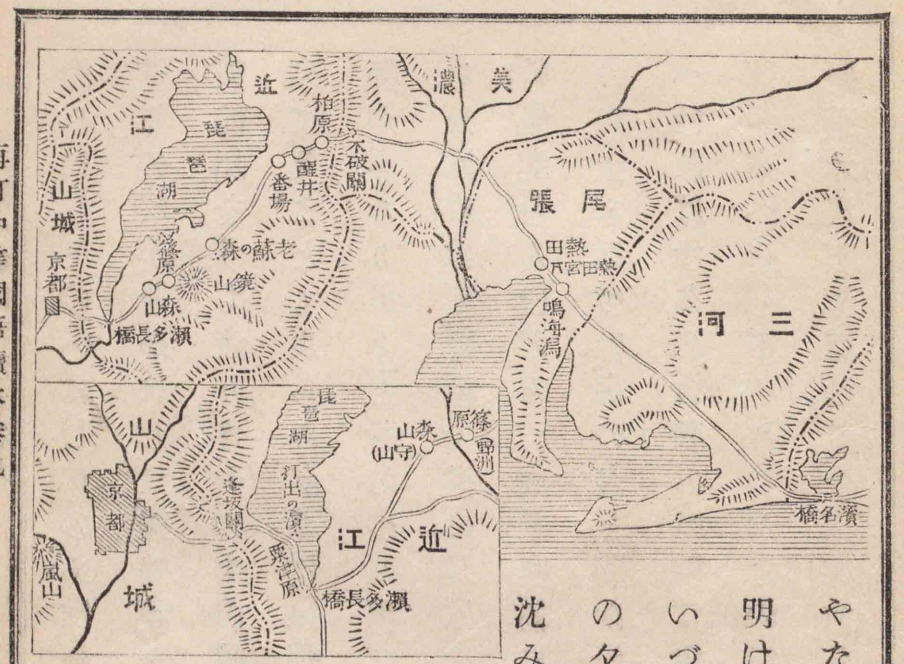
女院、この歌、あまりに、あはれに思し召して、窓の小障子にあそばし止めさせはします。かゝる御つれづれの中にも、思し召しなぞらふ事どもは、つちき中にも、數多あり。軒に竝べる植木をば、七重寶樹とかたどり、岩間に積る水をば、八功德水と思し召す。無情は、春の花、風に從ひて、散り易く、うかいは、秋の月、雲に伴ひて、隱れやすし。承陽殿に、花を翫びし朝には、風來りて、匂を散し、長秋宮に、月を詠ぜし夕には、雲蔽ひて、光をかくす。昔は、玉樓金殿に、錦の志とねを敷きて、妙なりし御住居なりしかども、今は、柴ひきむすぶ草の庵、よその袂も志をれたり。（平家物語）

二六、落花の雪

落花の雪に踏み迷ふ、交野の春の櫻がり、紅葉の錦著て歸る、嵐の山の秋の暮、一夜を明すほどだにも、旅寢となれば物うきに、恩愛のちぎり淺からぬ、わが古里の妻子をば、ゆくへも知らずれもひ置き、年久しくも住み馴れし、九重の帝都をば、今を限とかへりみて、思はぬ旅に出て給ふ、心のうちぞあはれなる。憂きをばとめぬあふ坂の關の清水に袖沾れて、末は山路をうち出の濱、沖を遙に見わたせば、潮ならぬ海にこがれ行く、身をうき舟のうきしづみ、駒もとゞろと踏みならす、勢多の長橋うち渡り、行きかふ人にあふみ路や、世をうねの野に鳴くたづも子を思ふかとあはれなり。時雨もいたく



もる山の、木の下露に袖ぬれて、風に露ちる篠原や、笹わくる道を過ぎ行けば、鏡の山はありとても、涙に曇りて見え分かず。物を思へば夜のまにも、れい曾の森の下草に、駒を駐めてかへりみる、故郷を雲や隔つらむ。番場、醒が井、柏原、不破の關屋は荒れ果てて、猶漏るものは秋の月、いつかわが身のをはりなる、熱田の八つるぎ伏し拜み、潮干に今



やなるみ潟、傾く月に道見えて、明けぬ暮れぬと行く道の、末はいづくととほたふみ、濱名の橋の夕潮に、ひく人もなき捨小舟、沈み果てぬる身にしあれば、誰かあはれとゆふ暮の、入相なれば今はとて、池田の宿に著き給ふ。

元暦元年の頃かとよ、重衡の中將の、東夷のためにとらはれて、この宿に著き

給ひにし、そのいにしへのあはれまでも、思ひ殘さぬ涙なり。

旅館の燈かすかにして、雞鳴曉を催せば、匹馬風にいばえて、天龍川をうち渡り、さやの中山越え行けば、白雲道をうづみ來て、そこともさらぬ夕暮に、家鄕の天を望みても、昔、西行法師が、「命なりけり」と、詠じつゝ、再び越えしあとまでも、羨しくぞ思はれける。隙ゆく駒の足はやみ、日すでに亭午に上れば、乾飯進むるほどとて、輿を庭前に舁き止む。轅を敲きて、警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、「菊川と申すなり」と、答へければ、承久の合戰の時、院宣書きたりし咎によりて、光親卿、關東へ召し下されしが、この宿にて誅せられし時、「昔南陽縣菊水、汲下流而延齡、今東海道菊川、宿西岸而終命」と、書きたりし、遠き昔の筆のあと、今はわが身の上になり、あはれやいとゞまさりけむ、一首の歌を詠じて、宿の柱にぞ書かれける。

古も、かゝるためしを、きく川の、
れなじ流に、身をやきづめむ。

大井川を過ぎ給へば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の、嵐の山の花盛、龍頭鷁首の舟に乗り、詩歌管絃の宴に侍りしことも、今は再び見ぬ夢と、なりぬと思ひ續け給ふ。

嶋田、藤枝にかゝりて、岡べの眞葛うら枯れて、ものの悲しき夕暮に、宇都の山べを越え行けば、蔦楓いと繁りて、道もなし。昔、業平中將の、すみかを求むとて、東の方へ下りしに、「夢にも人に、あはぬなりけり」と、詠みたりしも、かくやと思ひやら

れたり。清見潟を過ぎたまへば、都にかへる夢をさへ、通さぬ波の關守に、いとゞ涙を催され、むかひはいづこ三穗が崎、興津、蒲原うちすぎて、ふじの高嶺を見給へば、雪の中よりたつ煙、上なき思にくらべつゝ、明くる霞に松見えて、浮嶋が原を過ぎ行けば、志ほひや淺き舟見えて、下り立つ田子のみづからも、うき世をめぐる車がへし、竹の下道ゆきなやむ、足柄山のたうげより、大磯、小磯見れろして、袖にも波はこゆるぎの、いそぐとしもはなけれども、日數積れば、七月廿六日の暮程に、鎌倉にこそ著き給ひけれ。（太平記）

再訂
中等國語讀本卷九
終

明治三十八年十一月十五日再訂改版印刷
明治三十八年十一月十八日再訂改版發行
明治三十九年一一月十六日再訂第二版印刷
明治三十九年二一月二十日再訂第二版發行

全十册
定價 各卷金廿五錢

明治三十九年二月廿二日
文部省檢定濟
（中學校國語科用）

不許複製

著者　故落合直文
相續者　東京市本郷區駒込淺嘉町七十八番地　落合直幸
補修者　明治書院編輯部
發行者　東京市神田區錦町一丁目十番地　三樹一平
印刷者　東京市神田區雉子町三十四番地　宮本敦

發行所　東京市神田區錦町一丁目（特電話本局二四三八番）　明治書院
販賣所　東京市神田區南乘物町（特電話本局八九二番）　明治圖書株式會社